明治三十三年十二月二十日發行（明治二十年十一月本會創立）

第三種郵便物認可（明治廿二年四月四日）　毎月一回廿日發行　内務省許可（明治廿一年二月廿八日）

婦人衛生雜誌

第百叅拾叅號

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第百三十三號　目次

獨澳諸國大家眞像氏名

エル、ハルトマン 解剖　カアー、スクルツエツカ 衞生、行政　カアー、リーマン 法醫學　エー、グルト 外科

（二段目右より）　オー、ヘルトウイヒ解剖、　エル、コツホ衞生黴菌學、　エー、ローセ外科、　エーヘンノツホ小兒科



（三段目右より）　ウエー、ウアルダアイエル解剖、　フホン、ベルヒマン外科、　オー、リーブライヒ藥物學、　カアー、シユウアイゲル眼科、

（四段目右より）　アー、ニレンヒ耳鼻咽喉科、　エレ、オレスヘウゼン婦人產科、　エー、ライデン內科、　アーグスヒロー婦人產科、

（五段目右より）　カアー、ゲルハルト 內科　デユボア、レイモン 生理　エル、ウイルヒロウ 病理解剖　アー、バルデレーベン 外科

講演

衣服及衣服の洗濯

醫學士　古川榮君述
佃　速記事務所員速記

私は此處に御座いまする通りに、古川と云ふ者でありまして、今より凡そ十年ほど前かと思ひますが、華族女學校に於て、乳の事に就て、お話をしたことがありますが、今日も皆さんの中には、其節御目に掛つた方が、或は居らッしやるだらうと思ひます、兎に角今日此席に臨んで、一場のお話をすることを得ますのは、甚だ光榮のことゝ存じます、私は此處に演題未定と書いてありますが、成程今より十二三日前に、此本會にお約束を申上げる時には、演題未定でありまして、明かに申上げることが出來ませんでした、ソコで今日はどう云ふ事をお話し申さうかと、色々考へました、けれどもドウモ面白い御話もございませんです、併し今日は御婦人方のお寄合でありますから、御婦人方に極く必要な事を撰つて、即ち衣服の事と、それから衣服の洗濯と云ふやうな事に付て、一場のお話を致します、

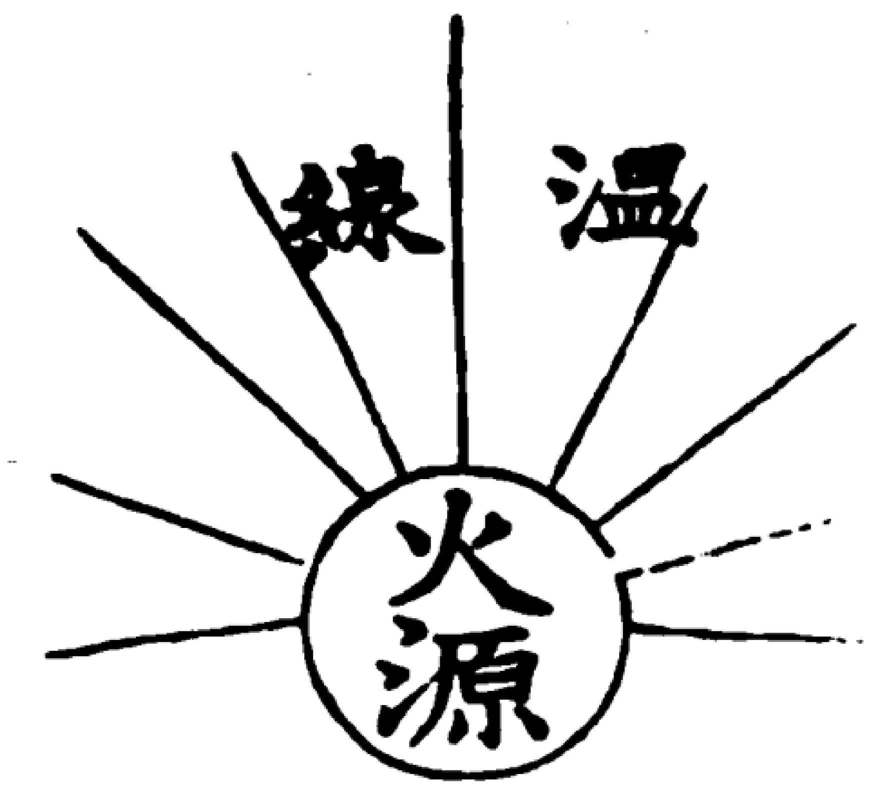
御婦人方は、どのお方でも、若くッても、年を老つたお方でも、大抵は衣服及其洗濯と云ふことに付ては、重もに御注意なさるに違ひない、所が御婦人方の注意と、私の方の注意とは、余程異つて居るものがある、御婦人方は、或は着物の縞柄とか、色合とか、又は仕立の具合などゝ云ふことが、御目に留まることが多い、けれども、此三ッは審美學は兎も角も衛生學の問ふ限りぢやない、衛生學上には、何にも關係が無い、今日の社會に立つて居る人の腦髓から考

出しては、此三ッは關係がありませう、中にも色合などは關係が餘程多い「ステーション」などへ行て御覧になると田舍から出て來た人は、着物の色の配合で能く解ります、さう云ふことには、色合と云ふものは大變に關係が深いけれども、衛生上には餘り關係がありませんから、私は其點に就いては論じません、

今私の申上げやうと思ひますのは、衛生上に於て、其利害のあります所の品物の質、例へば此處に斯樣な物がありますが（一種の布巾を示す）斯う云ふ植物製の物、或はどなたか召して居らッしやるでありませうが、絹、即ち動物製の物だとか、さう云ふ品質に就いて、申上げたいことがあるのでございます、此着物の事に就いては、皆さんは再三御聽及びになつて居らッしやるだらうと思ひます、殊に永らく日本に居られました所の——只今は一時歸省して居られますが、彼の「ベルツ」先生、それから學校衛生の專門の三島通良君、あゝ云ふお方から、再三お聞及びになつて居らッしやるから、御承知でもありませうが、尙ほ私が今日重ねて申上げます、

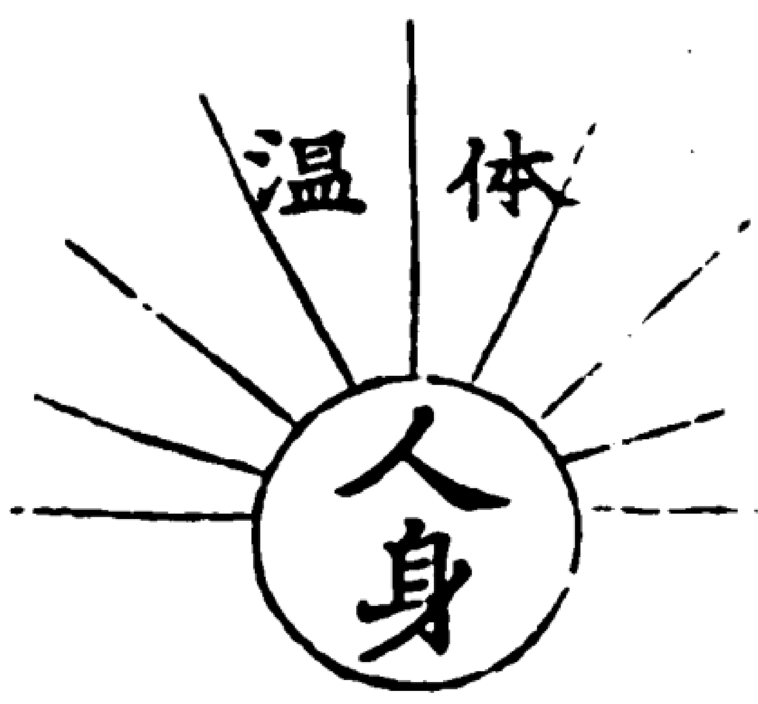
着物は、吾々が何の爲に、着るかと云へば、之は即ち温を保つ爲に着るのでありまして、吾々は温が無くては一日も生きて居ることは出來ません、人間は攝氏三十七度の温を有つて居ると云ふことは、皆さんもお聞及びのことがございませう、其以上なれば則ち熱であります、デ吾々生存して居る以上は、必ず温が無ければ、生きて居ることは出來ないが、其三十七度の温があると云ふことは、寒暖計で知ることが出來る、其他熱の有ると云ふことは、斯う云ふに皆さんが多人數お集りになつて居れば暖かい、又學校に大勢の生徒が寄つて居る室は暖い、其他芝居とか寄席とか云ふ處は、冬でも火鉢が要らぬと云ふやうに暖い、其譯は、例へばこゝに火鉢が在つ

て、火の元と假定しますと



斯樣に矢を放つやうに、此火の元から温を放つ、此放つ所の温線と云ふものが、乃ち方々へ散る、ソコデ空氣と云ふ物がありますから、此火の温線が傳つて行つて、さうして暖みを感ずるのであります

此火の元を人間の身躰と譬へて――三十七度の人間の身躰として考へて見ますと



斯う云ふ工合に矢張温を放つに違ひない、人間の身躰に有る温度も、矢張前の光線のやうな理屈に、亦空氣に傳つて往つて了ふから、身躰の方は、自然と温を失ふに違ひない、吾々が若し水の中に這入ると、

さうすると水は空氣よりも、モット温を導き易い物ですから、直ぐ冷かに感ずる、又雪の中を走る、さうすると雪も矢張空氣よりも、温を導き易いものであるから、甚だ冷たく感じて、遂には凍死することがあります、さう云ふ譯で此三十七度の温が有ると云ふことは、如何やうにしても、知ることが出來ます、極く容易い話であります、序でに著しい證據を申しますが、此温度の有ると同時に、大勢百人も二百人も千人も、人の寄る部屋では、空氣の交換が宜ければ宜いが、若し寒い時なとで、窓を閉めて置き、殊に夜は瓦斯などが點いて居りますと、非常に暖い、或は芝居とか寄席とか云ふやうな處は、多人數寄つて居るから非常に暖い、さうして一種の臭氣があります、之は人の臭であると言つて、昔物に書いてありますが、此臭氣は何う云ふ品物であるか、目にこそ見えね其性質は、大層稀な物でありま

す、其中には無論空氣の炭酸も有りますし、又吾々の身体から出て居る水即ち水蒸氣もあります、其水蒸氣と炭酸を除いて了ひまして、臭のする空氣ばかりでも吸入すれは、鼠などはコロ／＼死にます、さう云ふ空氣を呼吸するのは、勿論有毒なことであります、之も着物に關係がありますから後で委しく申上げることに致しませう

前に申した通り、着物は吾々の温を保つ爲で、今日吾々が地球上に生存して居る所の、此地球の表面上には、緯度の高い處も低い處もあります、日本で言へば北海道は緯度が高う御座いますから寒い、臺灣は緯度が低うございますから温い、さう云ふ風に寒暖が異つて居ります、昔に溯つて考へますと、余程此地球の表面は、昔は暖であつたのであります、又此地面を澤山に掘れば掘るほど、温度が増して來て、或は一定の深さまで掘れば、總ての金屬が熔けて居ると云ふ鹽梅に、大變熱い、それから地球は御承知の通り、今は二十四時間で一轉するのでありますが、昔はモット早い、さふ云ふ工合に變つて來ますから、此地球は段々數百千年を經つに隨ひ、段々冷却して來る、冷えて參りますから、其表面に住んで居る吾々は、段々寒氣を感じて來ます、そこで着物と云ふ物も必要になつて參りました

初め地球が暖でありました時分には、吾々は着物は要らなかつたに相違ない、裸躰であつたのでございませう、今でも印度か亞非利加邊りに行きますれば、此身躰の或る一部分を覆ふたるのみで、其他は全く裸躰になつて居るのでございます、或は臺灣に於ても、昔は矢張裸躰の人が多かつた、さう云ふ譯で段々冷却するに隨つて、衣服の必要と云ふことを、吾々は感じて來たので、即ち衣服は第二の皮です、第二の皮膚であります、ア此第二の皮たる衣服はかりで

は、まだ間に合いませんので、ソコで家屋と云ふ物が第二の衣服に當るのでございます、此家屋と云ふ物は、日本造もありますが、近來は煉瓦造もあります綠蘭の「エスキモー」と云ふ土人は、雪へ穴を掘つて其中に住んで居る日本でも北海道の「アイヌ」なども、一部は雪の中に住んで居ります、尤も昔の穴居と云ふのとは少し違いますが　デ衣服は第二の皮膚、家屋は第二の衣服であります以上は、此衣服と云ふ物は大變に大切な物であります、又家屋も第二の衣服たる以上は、大變に關係があるに違ひない、ソコで、どう云ふ關係があるかと云ふと、凡て此吾々の衣服、吾々の家屋と云ふ物の構造と云ふものは、永い年月の實驗で、此人間に適するか、或は適せさるかと云ふことは、數年間の經驗に依つて、見出したものであります、だから日本なる暖帶の土地に於ては、矢張日本風の衣服が適當である、隨つて日本風の家屋が矢張宜しいのであります、さう云ふ譯ですから、吾々は強いて洋服を着するに及びません、若し常々洋服を着て居れば、矢張家屋も自然西洋風にしなければならない、さうすると御婦人方などは殊に不便を感ずることがありませう、デ西洋風の建方ばかりでは不便と云ふ證據は皆さんも、御氣着きでありませうが、外を見廻りますと成程西洋風の建物は隨分有りますが、其片脇に持つて行つて、矢張日本風の建物があります、あれは恐らくは御婦人方の爲であらうと思ひます、あれを見ても、幾ら西洋風が宜いと云つて、急に着物ばかり改めた所が、到底家屋が承知を致しません、食物も同じことであります、急に日本風を廢して西洋風にしやうと云つても、中々行はれるものではない、ソコで日本服は日本人に適するが、併し場合に依つては西洋の服も適當であります、御婦人方が、先頃もお着になつた方

がありませう、十一月三日には帝國ホテルで舞踏會がありましたが、あゝ云ふ時には、西洋風でありますから、據所なく西洋服を着する譯でございます、又男子は仕事をするのには、洋服は筒袖でありますから、至極便利でございます、御承知の通り、昔から大工とか鳶の者とか云ふやうな者は、筒袖を着て股引を穿いて居りますが、那の服裝も矢張洋服に類して居ります、又學校の男生も、御承知の通り筒袖になつて居ります、男生の衣服は、當り前の袖の有るのを着るものは、田舎では往々見受けますが、東京では大抵筒袖でございます、デ何か仕事をするのに邪魔になると云ふことに就ては、昔から矢張さう云ふ風にして居るから、其人が必しも洋服を着るにも及ばぬと云ふことは、多年の經驗に依つて成立つて居るのでございます

是から着物に用ゐます所の、品物の種類を申上げますが先程申上げた通りに、此衣服の材料になる品物は、大別して二ッあります、御承知の通り、斯様な植物製の物(布巾を示す)木綿とか金巾とか或は麻だとか、さう云ふ物も御座いますが稀には紙布と云ふて、紙を用て拵へた物もありますし、琉球で出來る芭蕉布とか、又北海道では木の皮で拵へた「あつし」と云ふものがあります、それから第二の種類は動物製の物です、動物製の物は絹――皆さんが多分お召しになつて居ませうが、其絹、それから毛糸、羊の毛などを用ひて造つた毛織物、それから「モスリン」なんぞも風呂敷などになつて居りますが、凡て之等は動物製の物です、ソコで植物製の衣服と動物製の衣服の材料とは、どちらが宜いかと申すと、どちらも利害があります、先づどう云ふ風に用ふるかと云ふと、之は一定の極りはありませんけれども、植物製の物は大抵皮膚に直接に觸れる處へ用ふる、例へ

は、どなたも絹の足袋を穿いて居る御方はない、足袋は重々に木綿でありませう、此木綿や金巾は、總て植物製の物です、手拭を御覧なさい、絹の手拭は實用には餘りならない、必ず木綿です、斯う云ふやうに植物製の物は、直接に身体に觸れる所に多く用ふるやうです、それから動物製の物でありますが、何う云ふものか、之は直接に觸れる處にも使ひますし、例へば「フランネル」の「シャツ」とか、或は「フランネル」の卷腰とか云ふ風に使ひまして、又表面にも着る、例へば絹で拵へました所の着物を着るとか、斯やうに何方にも使ひます、此頃段々此織物の業などが開けるに隨つて、植物製と動物製の外に何ほ中間躰がある、即ち絹半分、木綿半分の品物があります、配合はどう云ふ具に這入つて居りますか知りませんが、兎に角種々に配合して拵へた物があります、之は獨り日本のみならず、矢張洋服などの品にも、さう云ふやうなのがあります、それは衛生上に於ては、別に非難する所はありませんが、經濟上、總て動物製の衣服の材料は價段が高いから、其爲に種々動植兩様を混合して、拵へると云ふやうな譯でございます、織物と云ふものは御承知の通り縱の糸と、横の糸とありまして、さうして縱の糸と横の糸と同等の太さのがありますし、又中には品物に依つては、縱糸の大層細いのもあります、横糸が非常に太いのもありますが、通常規則としては、木綿によらず絹物によらず、何しろ兩方の織緯は、先づ同等の太さが通則であります、此點は此後詳しく申上げます

ヂ着物は、躰温を保護して放さぬやうに、何時も保つて置かうと云ふのが目的でありますから、種々の性質を要するです

織物には斯う云ふ風に目があります（辯士格子の如

く綠を謂く）デ此着物の目と云ふものは空氣を通し、且つ空氣を保つて居なければならない、此横と縱との目の間には即ち空氣が這入つて居るのです、それで此空氣の這入る場所が二ヶ所あります、此目の間と、それから、モ一ツは此織に這入つて居る、即ち第一は目の間に這入つて居て、第二は縱横の織の中に合ンで居る、ソコデ織物の目は恰度水嚢の目と同じです、デありますから、目の大きい織物でありますれば、空氣が能く通るから涼しいに違ひない、夏は寒冷紗とか數寄屋とか、或は絽ですナ……絽は一番宜しう御座います、之等は丁度水嚢の目の廣ひのですから、能く風が通して涼しいのであります、併し此織の中に含んで居る空氣は、中々動かない、ですから織の太い即ち毛糸のやうな、物でありますれば暖い、靴下なども太い毛糸で拵へますれば、どうしても暖い、之は空氣の事でありますが、水も同じ理合です、若し此切れを（布巾を示す）水の中に浸しますと、其水は目の間に這入りますし、又織の中にも這入ります、それ故に水の中に浸して了ひますれば、其水が空氣を追出して了ひます、さう云ふ譯でありますから濡れた着物は暖くない、濡れた着物を着れば風を引くと云ふ道理であります、それから能く不精者が、丸洗ひと云ふことを致しますが、あれは余り宜しくないです、水で空氣を搾出して了ひますから、其着物は後で元の通りに、十分空氣を詰めることが出來ないから、どうしても、丸洗ひをした着物は寒う御座います、決して行るもんではありません、空氣が少い着物は、必ず寒さを餘計に感じるものでございます、それから綿入でも、極く古い綿入は決して暖くはありません、蒲團がさうです、古い蒲團は唯重いばかりで、暖くない、さう云ふ譯で、此織の中に詰つて居る空氣が少けれ

は少い程、寒さを感じる、寒いから遂には風を引く、風を引くと肋膜炎なんぞになることがあります、併しそれも慣れは多少は寒さを堪へても、左程のこともありません、例へば戰爭に臨む兵ですナ、日清戰爭の時などは、隨分困難を感じたでありませう、戰爭に行けば、ソレは雨の日でも雪の日でも野營と云ふことを致さなければならぬです、それでも其兵などは、御承知の通り強壯の年齢でもありますし、又慣れて居りますから、左程感じないのです、それから又夜でも何でも、構はず夜露に打たれて働いて居る車夫などゝ云ふ者も、矢張平生慣れて居りますから、餘り冐されぬのであります、けれども通常慣れて居らッしやらない、御婦人方などゝ云ふ者は、どうしても冐され易いに違ひない、序でに申上げて置きますが、襟卷なんぞは身体を弱くする基だと云ふことは、本會では既にどなたかお話になつたらうと思ひますが、此襟卷と云ふものは別段必要が無ければ纒ないでも濟む物でありまして、若し襟卷をすればそれを取ると直ぐに風を引くことがあります、それ故に襟卷などは強いて用ふるには及びません

ソコで第一には着物と云ふものは空氣が能く流通し、且つ保つて居ると云ふことが必要で、第二に衣服の性質と云ふことは、水に對する性質を申上げます、それは何う云ふ性質であるかと云ふと、即ち輙く水を吸ひ、又輙く水を放つと云ふのが、殊に此皮膚に直接に觸れる所の衣服の料に望む性質であります、例へば麻でありますれば、麻と云ふものは輙く水を吸ひ、そして又輙く放つ性質でございますから、夏などは能く麻を用ひます、又絹と云ふものは成程隨分輙く乾きますが、どうも吸ふことが不十分であります、輙く水を吸はない、それでありますから、夏汗の出るやうな時には、絹物はいけないと云ふこ

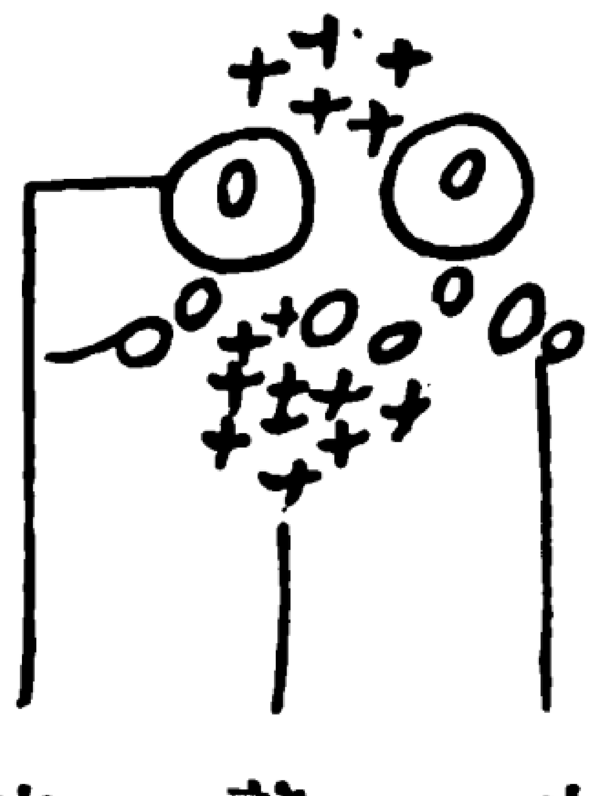
とは皆さん御承知でありませう、又皆さん蝙蝠傘を御覧なさい、乾くことは絹の方が早いが、厭ふことゝは木綿の方が多い、尤も是は同じ目方に配當しての論ですが：：：

第三の性質と云ふものは、經濟上に關して、此着物と云ふものは丈夫でなければならない、纖維と云ふものが極く丈夫に出來て居なければなりません、先程申した通りに、縱横の糸は規則として同等の太さの糸であると云ふことゝそれから木綿などは、隨分纖維の長いのがある、日本では餘り出來ませんが、御承知の通り亞米利加の「ニューオルシヤンス」ですナ、彼處らから來るのは、大變宜しう御座います、それ等の事柄は、紡績會社に行つて見ると十分解ります、不丈夫な糸と申しますれば、一遍火事なんぞに逢ひました物、例へば火事の時に倉の中に入れて仕舞つて、さうして周圍に火が繞つて、蒸燒にされたと云ふやうな、さう云ふ品物は必ず弱い、御承知の通りプツ〱です、それを古着屋などが糊を付けて、極く新しい物のやうに見せ掛けて、人を欺いて賣つて商賣にして、居る者があります、さう云ふ品物を知らずに買つて着れば必ず弱い、火の傍でに中して置きますが、若しも火を付けるとボ〱燃えると云ふやうな、そんな危險な着物がございます、尤も日本には有りません、けれども歐羅巴などには、火を呼ぶと云ふやうな、着物があるのです、大變に火に險呑だと云ふのがあります、さう云ふ物は無論使へません

第四には此纖維と云ふものは極く新しいのを望むです、古いのはいけません

又着物が垢附きますと、之を洗濯する必要がある、其衣服の洗濯は垢と汚れを落す爲にするのでありまして、ソコで其垢とは何であるかと云ふ、問題が起

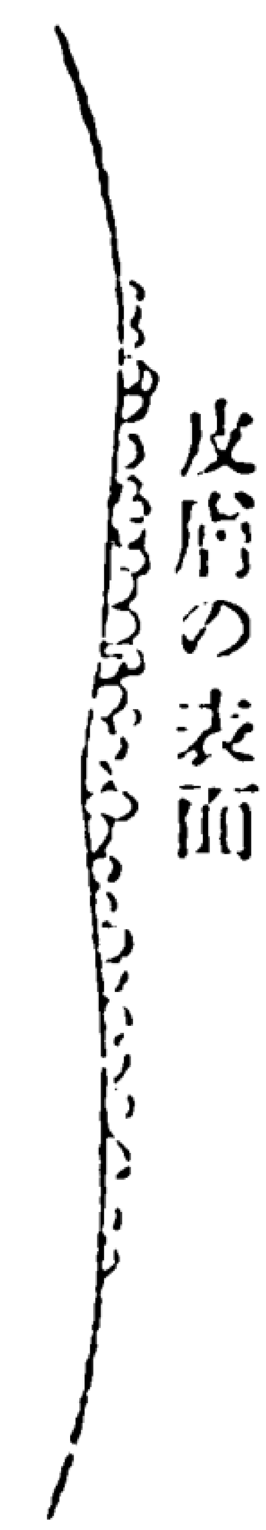
るに違ひない、垢とは何であるかと云ふことです、垢と云ふものは、此頭を掻きますと頭脂が落る、此頭脂と云ふものは、獨り頭のみならず、全身の此皮膚の表面に有るものです、成程目には見えませんが、斯うやつて強く掻けば(手を掻く)斯ういふように粉のやうな物が落ちます、之は即ち此手の皮にある雲脂に違ひない、それ故に此雲脂と云ふ物は、皮膚の表面にある所の薄い皮で、さうして何にも色がない皮です、此雲脂と云ふものは、印度人のやうな黒ンボでも、色はありません、何にも色のない所の糠見たやうな性質の皮です、ソコで垢と云ふものは、其雲脂と、それから空氣の中に有る塵です、それからモウ一ツは衣服の色です、染物の新しい中は、此皮膚に色が付くことがあります、其三ツの物をば此皮膚から出る所の脂肪、即ちあぶらと汗と捏混ぜたものが、即ち垢と云ふものであります、脂肪は皮膚から流れ出るものでありまして、顯微鏡で見ますれば、斯んなものです



人間の皮膚は、顯微鏡で見ると、斯んなものが成立つて居ります、それから皮膚の表面は、顯微鏡で見ると丁度、マア山と谷から成立つて居るやうなものです、恰も剃刀の刃の所と同じやうです例へば剃刀の刃と云ふものは、平坦なやうに見えますが、決してさうではありません、丁度鋸の刃のやうになつて居る

斯う云ふ風になつて居ります、どんなに能く切れる剃刀でも、マルで鋸の刃のやうで、丁度山と谷のやうな形をして居ります、皮膚の表面も之と同じで、

矢張山と谷の形から成立つて居ります例へば



斯う云ふやうに、山と谷の形をして居りまして、決して平らなものではありません、それでありますから、湯に入つて「シャボン」ではなく、糠を使ふと、其糠の粉が此谷のやうな低い所へ這入つて仕舞ふ



ソコで斯う云ふ風に谷が無なつて仕舞ひますから、ツル／＼なつたやうに思はれますけれども、さうではない、其實、糠の粉で埋めたんです、顯微鏡で御覽なさると解ります、此谷のやうな所に、糠の粉が一ぱい這入つて居る、湯に這入つて糠で洗つたから、ツル／＼して清潔になつたやうですがさうではない新たに糠を入れたやうなものです

ソコで第一に此雲脂と云ふものは、常に吾々の皮膚の表面から、其古いのが段々外へ出て落ちて了ふ例へは之が吾々の皮膚としますと（辯士少しく彎曲したる線を畫く）此表面へ澤山雲脂が重つて居るから其古いのは段々着物に擦れなどして、自然と外へ出て了ふ、さうして乾いて粉になつて飛ぶのです、さう云ふやうに全身の皮膚が、新陳代謝して居るので古いのは自然と飛んで了ふ、耳の穴なんぞには——尤も穴でありますから、出ないで溜つて居るのですが、此耳糞と云ふものは即ち雲脂の塊でありおす、それから此髮の毛ほど、餘計に垢の溜るものはない御承知の通り枕の切と云ふものは、大變早く汚れるもので、よしや油を付けないでも、大變に汚れるものです、だから看護婦などは御覽なさい、頭を切で覆ふて居ります

第二に空氣中の埃、此空氣中の埃は見ることが出來易いです、貴方がたが、朝起きて太陽の光線に暗い所の室も照して御覽なさい、無數の細かい埃が舞つて居ります、其埃は一定の重さがありますから、臺なら臺、箪笥なら箪笥の上に段々積つて山をなします、此埃と云ふものは甚だ險吞なもので、其中には色々の病の原となるものを含んで居ります、時に依ては「ペスト」の病原なども含んで居りませう、或は破傷風と云つて、引釣つて死んで了ふ、さう云ふ病の病原も含んで居りませう、殊に道路を來る時など、飛んで居る所の砂の中にも含んで居ります、其實例がありますが、先日の初ですが、此牛込の赤城下に居る私の友人に、二十四五になる細君があつて、其細君が决水糟の先で何かに躓いて足の爪を少し剝しました、隨分痛かつたでありませう、併し血はそんなに餘計は出ないで、先づ相當の治療をして、それは日ならず直りました、所が一週間ほど經つてから此顏の兩方にある筋が、食物を喰べる時に非常に痛みを感じて來まして、之は變だと思つて居りましたが、三四日經つと、今度は隙間から風が來るとか、又は誰か聲高く步くと、直ぐに引釣つて來て、弓のやうになつて後ろに倒れる、さう云ふ工合で一週間經つてから死んで終ひました、それは破傷風の病原が、土埃の中に有つたので斯う云ふ譯になつたのであります、一體此埃と云ふものは疊の上でもあるもので、能く子供なんぞは疊の上で角力を取るとか、或は巫山戲てからに、轉んで膝でも擢剝くと、さう云ふ所からも此破傷風を起すことがあります、尤も場所にも依りますが　殊に此手足の先の小さい疵が、一番破傷風になり易い、で昔は血が出れば十分に出して了ふ、尚更餘計に出したもんです、そうすれば血と共に病毒を流して了ふ譯です、或は昔は

焼火箸で焼いたもんです、さう云ふ風にして豫防した、併しながら今日は、其破傷風と云ふものはメッタにありません、今お話した二十四五の細君が死んだのは、實に近年稀なる位であります

第三に色です、着物の色が皮膚に付くと申しましたが、之は別段詳しく申上げるにも及びませんが、先づ通常附くものは藍です、どんなに呉服屋が保證して、之は附きませんと云つても多少は附くものです、又赤い色もどんなに保證しても、矢張多少は附くことがあります、殊に水でも附いた時とか、或は汗が出た時などは、どうしても附き易い、それでありますから、此衣服の色も、其染料の有害なのは無論いけません、だから害の有る色で染めると云ふことは、許されぬに違ひないです

第四には脂肪です、此皮膚から出る脂肪と云ふものは、圓い玉になつて居りまして、さうして此脂肪は水と混りません、夫故に水に泳いでも、湯に浸つても、或は水の中を足で這入つて來ても、皮膚と云ふものは此脂肪があるから、餘り水を吸はない、ツマリさう云ふ豫防の爲に此脂肪と云ふものは噴くのです、でありますから此ニキビと云ふものは、脂肪の塊と云つても宜い位です、ソコで鷄を御覧なさい、雨の降る時に、雄の鷄が簷の下に、尾を垂れて居りまして、さうして嘴を尾の近處に廻して、尾の邊を啄突いて居ますが、皆さんも能く御覧になることがありませう、あれは何う云ふ目的かと云ふて、あの尾のある元には、一般に脂肪が多いです、デありますから鳥を喰べる時に毛をむしッて御覧なさい、尻の部分は殆んど脂肪ばかりです、彼處が脂肪の源で、餘計ありますから、彼處から脂肪を取り、さうして其身体中の毛に塗り付けて、雨に濡れることを防ぐと云ふ目的であります、さう云ふ風に此脂肪と云ふ

ものは水に濡れることを防ぐと云ふやうな工合になつて居ります、此と同じで人間の身體も此脂肪と云ふものが常に出て居りますから、之が表面に垢を拵へる種ともなるのでりあます

それから終りに汗です、汗と云ふものは何かと云ふと、御承知の通り鹽水です、人間の目から流れる涙と、それから汗ほど、鹽の餘計あるものは無い、殊に御承知の通り夏など、汗をかくと、着物が白くなります、即ち車夫などは汗をかいた時には、背中が白くなつて居ります、あれは鹽が結晶したのであります、又時とすると、臭が致します、殊に腋の下から出る汗と云ふものは、必ず臭があるのがある、此腋臭と云ふものは、之は中々治療することは——根から絶すと云ふことは出來ません、それから一番初め申しました所の人臭ですが、此人臭と云ふものは、先程申上げました通り、大變に他の人間や動物に對つて毒なものであります、此人臭と云ふものは、多人數集らないでも、人每に備へて居る、吾々の此鼻と云ふものは、余り鋭敏ではないから、能くは解りませんが動物殊に犬は大變能く解る、犬は自分の主人と云ふ者を、臭で知つて居る、其家に飼つて置きます所の犬と云ふものは、其家に十人居りますれば十人とも臭で知つて居ります、ですから其一人が車にでも乘つて、どつかへ行つて分らないと云ふことが御座いますれば、犬は其車を嗅ぎ出すことが出來る、甚だ便利です、それから又人每に臭があると云ふことは、手拭でも分ります、使ひ古した手拭なら、眞暗な夜でも分ります、能く女などは、男の手拭は男臭いなど丶申します(笑聲起る)又男は女臭いなど丶申しませう、あれは決して男、女臭いではない、即ち人臭です、又煙管も分ります、燈を消して仕舞つて、さうして煙管を五六本置いて、各々に其煙管を

取つて來やうぢやないか、と云ふやうなことを致すと必ず當ります、殊に自分のは、決して間違ふものてはありません、手拭も其通りで間違ふものでありません、さう云ふやうに人毎に多少人臭のある證據はそれて分ります

そこで唯今大抵述べました所の垢ですが、垢及びそれに附屬した人臭を以て塗れて居る衣服は、穢いに相違ない、穢なければ何う云ふ風に、身体に適せないかと云ふと、例の通り織物の目と目の間に、垢が籠つて居るから空氣の這入る場所が無い、且つ汗でもかければ、其汗は此中に染みて了ふに違ひない、即ち種々前申した所の、着物の性質を失ふのです、失ふて了ふから健康に適せないに違ひない、それで垢が澤山附きますと、一種の臭氣が致します、臭が致しますが、其惡ひ臭が、强ち健康に害があると云ふ譯ではない、臭いから、そこに必ず傳染病の病毒があるかと云へば、決してそうではない、臭いから必しもそこに惡い物が宿ると云ふことは無い、けれども誰しも餘り好むものではありません、學校へ行く子供などは、其母親が洗濯をして遣らないで、不精にして置くと、一種の臭氣を放ちます、俗に乞食臭いと申しますがネ、それで子供の服裝を見て母親の性質を知れと云ふことがあります、それから又田舍を廻つて、神社佛閣などへ行つて見て、其處の手入の行屆いて居るかを見て、其村々の良いと云ふことが知れる、其村の人の性質が良くつて、凡て衞生上などには欠點が無いと云ふやうな村に限つて、神樣や、佛樣の前が大變に整つて居ります、之と同じで子供が垢附かない衣服を着て居る位なら、其母親と云ふものは必ず良いです、子供を見て母親を知れと云ふことは、本當のことでございます

是から洗濯のお話を致します、洗濯に就いて、誰し

も望む所は、其洗濯が簡便で、そうして價が廉い、且つ品物を傷めないと云ふのは、誰しも望む所であります、隨分慾張つた望です、極く手輕で廉くッて品物が傷まない、さう云ふ目的を遂しやうと云ふのが、洗濯の本色に違ひない、それで先づ何うして洗ふかと云ふと、只の水ばかり持つて來たのでは、今のお話のやうに、汗だの色々のものが附いて居りますから、中々只の水では其效を奏しないから、何か加へなければなりません、石鹸と云ふものは、佛蘭西から輸入したのでありまして、此石鹸が、まだ日本に輸入しない前は、灰汁で洗つたのであります、灰汁の製造法は皆さん御承知の通り、凡そ一斛の木の灰を四升の水に入れて、さうして攪拌ぜて、上の澄んだ所を用ふると云ふことが、消毒法に規定してあります、それで食器なんぞを洗ふのは、極く簡便な物であります、此灰汁と云ふものは、酸性に反對の物を含んで居りますから、汗だとか埃だとか云ふものを、溶し出すと云ふ有樣でございます、ジ石鹸が外國から輸入して參つて、今では內國でも製へますが、之も矢張「アルカリー」性の物であるから、灰と同樣の働きを致しますから、此石鹸を重もに使ふやうになりました、ソコで御承知の通り、石鹸には硬いのと、軟かいのとありますが、硬い石鹸と云ふものは通常用ふる所の、洗濯シャボンとか、或は洗石鹸、化粧用の石鹸などは硬い、それから軟かいのは、醫者の方で用ふるのでして、之は別です、それから水にも硬いのと軟かいのとある、硬いのは石灰を澤山に含んで居りますが、軟かいのは其石灰が殆んど無いと云ふ位であります、そこで物を洗ふには此軟かい水を使ふのが一番宜い、軟かい水と云へば、新水道の水に超したものはありません、井戸の水よりも、此新水道の水が一番宜い、殊に白い物を洗ふ

には、極く宜しく又食器などを洗ふのに、極く宜いのです、ソコで昇汞水と云つて、水銀から拵へたものがありますが、之は傳染病に用ひますから、御承知の方もございませうが、其昇汞水が少しでも身躰に附くと、直ぐに痂れて腫物のやうになります、私の懇意な人で、丁度二ヶ月前に獨逸から歸つて參りましたが、其人は歐羅巴に居ります間は、昇汞を使つて居りながら、其昇汞に負けなかつたが、日本に歸ると負けて痂れる、デ何う云ふ譯かと云ふと、彼方では水道の螺旋を開けて、其口の處へ手を當てヽ洗ふから、それで前申した所の谷や、山の間に有るものを皆スッカリ洗ひ落すことが出來る、昇汞を使つた時にも、十分綺麗に洗ふことが出來るが、日本では唯銅盥などに水なり湯なりを入れて、さうして洗ふのですから、其銅盥が、どんなに大きくッても矢張水が更換しませんから、其附いた所の昇汞が、幾分か殘つて居りますから、此邊が皆爛れて了ふ、斯う云ふ譯でありますから、清潔法の目的を達するにも此新水道に限る、のみならず、日本の水税は大變に割合が廉い、御承知でもありませうが、水量計で計つた水が、一立方メートルに付て三錢です、石に積つて一石六厘以下にしか當りません、五厘四毛幾らとかです、大變廉い、でありますから新水道の引ける處は、必ず之をお敷きになる方が宜からうと思ひます、それから西洋洗濯と云ふものは、御承知の通り石鹸を用ひ曹達を用ひ、それから煮るのです、且つ板の上に持つて行つて叩く、それでありますから大層着物の質を損する、時に依ると穴が開いたり、色々なことがある、殊に日本人は此「カラー」とか「カフス」とか色々白い物を、成べく黒くなるまでは着て居ります、それ故に西洋洗濯に遣つても、成べく餘計叩かれる、隨つて成べく餘計品物を損ずると

云ふ話で、却て餘り黒くして遣つては、損だと云ふことを、西洋人が言つたが、成程それは、さうかも知れません、それよりも早く手入をした方が宜しうございます

それで洗濯に就いて、極く簡便で廉くッて、質を傷めないと云ふことは、中々普通の洗濯法では、迚も望むことが出來ません、そこで今東京の淺草區松葉町八十八番地にある、東京瓦斯消毒所と云ふ名前で、電話は浪花の千七百一番ですが其處に賣つて居る液――少く黄色を帯びました液ですが、之は非常に便利なもので、さうして代價は極く廉いものでありまして、且つ手間が掛らない、其用方は何うだと云ふと、木の桶か盥(金盥は禁物です)さう云ふ物に、其液を水と等分に入れる、例へば之を洗ひますならば(布巾を示す)先づ小さい桶か盥の中に、一合なら一合の液を入れて、それに一合の水を入れると、丁度二合になる、ソコで此切を其中に入れて、ヒタ／＼になるやうに之を浸けて置く、さうして十分間か十五分間浸けて置き、それから出して多量の水の中で濯ぐのです、揉むには及ばない、さうして乾かしますれば、如何ほど垢の附いて居る物でも、何の事も無く直ぐに眞白になります、誠に簡便です、併しながら一ッ困ることには、若し此液が手に附くと荒れます、濃いのが附くと水泡になることがあります、それを豫防するには、洗濯が濟んだら、臺所へ行つて糠味噌の中へ手を入れるんです、或は糠味噌は臭くッて嫌ならば、酢と水を等分に薄めて、それで手を洗ふ、さうして置きますれば左樣な火傷に類するやうな怪我はありません、若しそれを何時でも試みに遣らうと云ふ者があつたら、今申した通り淺草松葉町八十八番地へ行けば、其處で與へますから、お使ひになつたら宜しうございませう

今度は着物と病氣です、着物が垢を以て汚れますと、先程申した通り着物たる所の性質を失ふとか、或は臭氣を發するとか、色々な缺點があります、又非常に汚れた物があると、どうしても蚤だの虱と云ふものが、たかり易い、決して垢から、さう云ふ動物が出來るのではありませんが、兎角其垢と云ふ食物が澤山あるから、それで、さう云ふ小さい虫が、そこに宿り易いのです、之も洗濯して、着物さへ能く更換しますれば宜いのです、俗に賣つて居ります所の虱紐などゝ云ふやうな物は、決して用ふるには及びません、それよりも着物を能く更換する方が、早手廻しでございます、蚤は床下に石灰でも澤山撒けば減じることが出來ます、垢を附けて置けば、皮膚病なんぞが發し易い、腫物が發し易いでありますから、此皮膚病を防ぐには、皮膚を清潔にするのは無論でありますが、第二の皮膚即ち衣服も清潔に保たなければなりません、殊に此髮の毛は大變に埃に塗れ易いと云ふことは、先程申上げました通りで、又看護婦が白い物を纒ふて居りますが、此白い物は一躰目的が有るのです、白い物は臭氣と病毒を吸ひ難いのです、病人などが澤山居りますので、色々な臭氣があるから夫れを吸はないやうにする、のみならず白い物と云ふものは、汚れが能く目に着くから、直ぐに洗はなければならぬと云ふ目印になる、さう云ふ爲に使ふのでございます、夏なども矢張白い物が宜い、經濟上は何うか知れませんけれども、夏白い物を用ふれば光線を吸收するのでなく、却て反射するのですから、甚だ宜しいのでございます

それから着物と云ふものは、傳染病の媒介を爲すことがあります、着物に依つて病が移る、殊に八種傳染病の中の疱瘡とか猩紅熱、さう云ふ傳染病と云ふものは、此着物に依つて媒介されることがございま

す、此皮膚に腫物が出來る病のみならず、或は結核です、肺病です、それから今日大坂神戸にある「ペスト」なども、矢張着物に依つて移る、若し此着物に「ペスト」の病毒が附いて居れば、此着物を以て摩つて居ると、直ぐにそれから「ペスト」が這入ります、昨年の十一月八日には、則ち「ペスト」が神戸に發したのでして、モウ一週忌は濟みましたが、其時に鐵道の書記の古川鉦三郎とか云ふ者が、確か三十前後の人ですが、其人が丁度十一月の初時分に「ペスト」に罹つて死にました、所が別段に疑はしいこともなく、唯毎日筆を取つて居たばかりであるが、何うして「ペスト」が感染したのだか分らない、ソコで段々取調べて見ますと、其人は古洋服を買つて着して居つたが、其性も分らぬ所の古洋服を買つて、それを消毒も何もしないで其まんま着たから、それから此「ペスト」が感染したのであらうと云ふことが分つた

さう云ふ事がありますから、古い物は中々險呑です、それから古い襤褸なんぞも餘程險呑でございます、殊に御婦人方には襤褸などゝ云ふものは關係がありますから、若し襤褸を用ふるやうなことが、あれば消毒した上でお使ひになるが宜しう御座います、それから肺病などで死んだ時でも、構はず其人の着物を遺物とか何とか云つて、親類其他の人に配付することがありますが、之は甚だ險呑な話でございます、肺病で死んだ人の着物を、唯其まゝ配付すれば、其貰つた爲に自分が肺病になるかも知れません、デありますから是等の物は總て一時消毒する方が宜しい其消毒は、どう云ふ風にするかと云ふと、今日までの方法では、スッカリ色が褪めるとか、着物の質がボロ〳〵になつたり、それから臭味が何時までも附いて居るとか、色々なことがあつて其まんま色も變へず、品物も損ぜず、遣らうと云ふことは何うして

も出來なかつた、此頃になつて「ホルマリン」水――理髪床で用ひて居りますが、其中に溶けて居る瓦斯、其瓦斯を以て消毒する、さうすると、どんなに綺麗な着物でも、其他花類でも、其瓦斯に逢ふて少しも變化しない、或は金屬なども、座敷の置物でも、それを以て消毒して一向色などは變りません、之も松葉町で賣つて居りますから、遺物とか其他若し古着などを買入れる必要があつたならば、其儘消毒もしないで、着ると云ふことは甚だ險呑でありますから、呉々も其點は御注意召して、夫れを買つたら消毒をなさるやうに願ひます、遺物こそ今は仇なれ是なくは不治の肺病に罹りてアッタラ命を捨てましものとは跡の祭りにて臍をかむも詮なし殊に御婦人方は着物に御注意の點が多いものでございますから、今日は其廉々を一言申上げて置きます　（了）

山形支會講演

口中齒の衛生

齒科醫　高橋貞次郎君述

これより口中齒の衛生につきて御話致さん

近頃は衛生の思想大に進步し一般世人の注意するに至れるは誠によろこばしき限りなり古來より我國の風習として齒の攝生法は大に不注意なりき何故かといへば齒の病は一命を亡ぼすか如き事なきものと思ひ居りし故自然其攝生法粗に流れたり其弊害今も尙存するなり齒の衛生の行き屆くは文明の兆候にして餘程國の進みたる所ならされはこの攝生法は完全せすされは齒の養生を成さゝる國は未開の地と云ふも可なりとか

齒の衛生には注意せすともよろしきやう昔は考居たれと齒の健康不健康は大に身躰の健不健に關係あり抑も齒といふものは身躰の衛生に比すれば齒の衞

生はいと大切にして歯のよろしきは自然の腹内の衛生といふも可なり身躰の衛生には土地空氣の新鮮飲食物等の如き自然的の衛生法あり然れども歯はこれと異なりて人事的衛生にして常に注意せざるべからす一旦歯の病にかゝりて歯を損する時は自然の作用によりて本復する事能はすして愈々益々進みて遂には身躰に害を及ほす事少からすされは始めよりよく手當をなさゝるべからす少しにても苦痛を感するに至りて手當をなすは早や其時期の後れたるなりこの口中の位置は如何なる處にあるかといふに上下顎骨の間にありて歯は上下に並びてあり眼球又は腦と非常なる關係ありて歯の爲めに眼病腦病等にかゝり又耳をも損する事あり又眼球の調節機を損して結膜炎等の病を起す事あり歯の機能は吾々の容貌上にも亦非常の關係あり即ち歯抜ければ頬こけて老人の躰をなし又吾々の話をなすに餘程關係ありて其効用少からず第一の機能は吾々の營養物なる食物を消化する事なり而して吾々の健康なる躰質を維持せんとするには必ず善良なる食物を撰擇せざるへからず擇ぶとて敢て美食するに非す善良なる食物を撰擇するとは口中に美味を感するよりは寧ろ消化吸收の如何によらざるべからず此の如くするには食物をよく咀嚼して唾液とよく混和せしめ半は口中にて消化せしむるなり唾液は食事せざる平時にありても常に吾人口中にあり黴菌を消滅するの力あり又食物を分解するの性ありて飯の如き澱粉性あるものを變して糖粉となし以て胃中に贈るなりさすれは胃は動き得る限りの力を出し充分に動くべし故に歯堅硬なれは命長しと云ふ食物は熱きに過ぐべからす早食は甚だ害あり抑も我國人は歯の大切なる事に注意せず又食物をよく咀嚼せすして早食ずるの習慣ありこの早食は衛生の思想に乏しければなり凡て食事の遲きものは何事

も遲きなといふ考より遂ひ早食をよき事とせしならんされは日本人にして往々胃弱者の多きも皆之に基けるならん歯は吾々の生活上の關門にして衛生中第一に位する所なり故に若しも口中歯の攝生法を怠る時は恐るべき惡疫にかゝりて生命をも亡ぼす事あり口中はかく恐ろしき病の入る通路にして近頃最も恐るべき所の傳染病は黴菌の原因するものにして黴菌は口中に密接なる關係を有するなり赤痢、虎列剌、膓窒扶斯等は皆口中より入る口中は澤山の黴菌のおさめられたる所にして殊に種々の黴菌の發生し安き所なり且つ吾等の水を飲み空氣を吸收する爲めに黴菌は生育す唾液中の黴菌のみにしても三十通り餘ありされは歯間或は虫歯中には何程あるか之を推して知る能はす最も其中には害少なきものあり外見の健康なる如き人も肺炎實布的里、肺結核、等の病におかされ居る人あり概ね皆黴菌の媒介なり殊に恐るべき肺結核等は口中の黴菌の爲めに空氣中より他人の口中に入りて傳染を來すなり又黴菌は口中に一旦滯在して後躰に入る故に口中の衛生は重大なり黴菌は如何にして口中と密接なる關係ありやといふに口中には適當なる温度あり又吾人の呼吸等は黴菌の發育に最も適當なるものなり口中にて食物歯間に滯りて腐敗すれは黴菌に適當なる發生物の材料を與ふるなり此時に當りて若しも人躰衰弱し居る時は其勢に乘して身躰に害を及ぼすなり如何にしても口中は大切に保存すべきなり又諸病の爲めに歯の病を起す事もありそれに對する豫防法最も大切なれとさし當り必要なるは虫歯の攝生法にして害を及ぼす事最多く其及ぼす所の範圍も亦いと廣し故にこれか衛生完全ならは大躰の衛生は皆行き屆きたりといふも可なり虫の發生する原因は豫防法の充分ならさる爲めなり歯には成歯、乳歯の別あり成歯とは即ち永久歯

にして大人の歯なり乳歯とは小兒の歯所謂乳飲歯なり大人となりて其歯を堅硬ならしめんには小兒の時よりよく注意せさるべからず生れてより七八月位に至れは上下奥の方に歯生じ二三歳迄の間に全數完備じ其數上十枚下十枚都合二十枚なりこの乳飲歯は最も柔軟にして弱く一枚病にかゝれは次に傳染し遂には成歯にも及ほす事あれは注意せさるべからず換歯の時期に至りても猶其まゝになし置けは成歯は乳歯の根底に萠出し次第に成長して乳歯と交代するものなれは其場所を失ひて内外出入自由にして不そろひとなりて容貌を見苦しくするのみならず顎骨を變して生涯の大不幸を見るに至るべし乳歯は兒童の七八歳に至るまで即ち其發育中に變化を及ほすものにして此時期は最も大切なれは力を盡さゝるべからず小兒は糖分を好む其糖分口中に入れは酸化して口中歯ともに不清潔となりて歯のいたみ等を感じ遂には胃腸を害す從て脳又は知識の發達に害を及ほすものなり之を自然に任せ置けは交換期に至りて成歯の發する場合に吸收消散の機能なくなりて成歯の妨げをなす故に之を注意する時は歯並よく殊に顎骨を害する事もなく天然の美貌を保つを得べし交換期は大抵七八歳位よりして十三歳位までにして此間に成歯皆出づるなり智歯は俗にいふ親知らず歯にして之は二十歳前後に出づ智歯は例外なれとも小兒の交換期は其親たるもの最も注意すべき時なり此際よく交換せしや否やをしらべ以て其手當をなすべし此時期に當りて親たるものは洒布の如きものを薄き鹽水に浸し之を以て兒童の歯の内外をぬぐうをよしとす二歳位より四五歳迄は日々二度は必すなすべしこれ歯根を摩擦して其歯を最も健硬にするなり五六歳に至れは食後には必ず冷水を以て口中を注ぐべき事を敎へ又自分一人にてもなし得るやう習慣を附すべし七八

歲に至れは「ブラッシ」を用ゐしむべし多少堅きものをよしとすさすれは齒根を强くし又齒も自然丈夫になり大に良結果を來すべし食物は必す時を定めて與ふべし口中は外見にかゝはらされはとて注かさるもの多けれとこれはあやまりなり少しく成長すれば流動物或はやわらかき物のみならす少しく堅きものをも與ふべし交換期に當り最も大切にすべきは臼齒なり此時期には虫齒生し安き故なり虫齒は大に身躰を害し直に他に傳染し堅きものは勿論流動物と雖も之を食する事能はさるに至る甚しきは顎骨に達し之を損し又血液にも害を及ぼし種々の病をひき起す事ありて遂には生命も危きに至るべしされは平素によく注意せざるべからす虫齒の原因は口中に酸あるによりて起る食物の齒間に滯在するものあれは温度と濕氣とによりて酸敗す此時黴菌は其食物の殘片によりて寄生す之より虫齒となるなり酸を作るに適當なるものは澱粉砂糖牛乳とす中にも牛乳は口中に入れは殊に酸化し安し病性乳姙娠の時期には最も酸性あり齒質の弱き人は虫齒におかされ安し故に清潔法を怠るべからす黴菌の害は注意せは之を防ぐ事を得べしされは平時によく注意して口中を清潔になし置くべし小揚子は成可く用ゐるべからず、若し用ゐんとせは銀製の細きものを使用すべし(ブラッシ)は堅きに過ぐるはよろしからす又あまりやわらかきは之をつかひしかひなし故に適當なる堅き毛の長きものを用ゐるべし大抵の人は五回位口中を注ぐべし食後には必す注ぐべき習慣を附すべし齒の內側は殊に注意すべし齒磨粉は細ならさるべからすあしきものは外部なる琺瑯質を磨損するの恐あり又琺瑯質は其生力遲緩なるを以てこれを破る時は其再生するに先立て齒質漸く磨損し終には其全齒を滅却することあるを以て常に其保護に注意し堅硬なる物躰を咬破し或は

重物を咬挙するか如き危險なる擧動をなすべからす齒の磨損し易き人は石鹸の如きものを用ゐ歯みがき粉を用ゐさるをよしとす日本人には齒に注意するもの少く外國人には最も注意するもの多く殊に綿密なるものなり齒の攝生法は最も大切なれはよく〳〵注意すべし

（完）

○竹中醫學士の肺病者攝生法及び衛生叢談中皮膚病の續稿は紙面の都合により今回は休揭す

寄書

左ノ一篇ハ在臺灣の贊成員松住氏ノ紹介ニテ人類學ニ熱心ナル伊能嘉矩君ノ實驗ヲ述ヘラレタルモノナリ伊能君ハ五年間臺灣ニアリテ熱心ニ蕃族ノ取調ヲ為シ單身蕃地ニ入リ生蕃人ニ接シ實地目擊シタル中ニ就キ無智ナル生蕃人ニモ衛生上ノ觀念ノアル事ヲ感シタル點ヲ摘ミテ茲ニ記サレタルモノナリ

臺灣土蕃の衛生及び治病

伊能嘉矩君述

清の康熙の中葉に編成せられし臺海採風圖といへる書に土番の俗を記したる中に「有病亦取水灌頂傾瀉

而下以深身烟發爲度未發再灌透則病癒」との事見えたり是れ乃ち臺灣土番の衞生治病の知識に關する記事の最も古きものにして今も尙ほ荊棘樹林深く茂れる山深幽谷を無上の樂境と恃みつゝ自然の生計を求めつゝある彼等には其の天年を保全すべき衞生治病の知識甚だ幼稚なるを免かれず殊に其の幼年の時代に在りては育兒の方法宜しきを得ず海拔殆ど四五千尺の以上に及び中央山地の中隆寒盛暑苦雨凄風と雖も之に適する衣食住の完からざるが爲め生れて三四歳の間にわはれ鬼籍に入るもの最も多しといふ又其の年老ひ體衰へて一朝病に染むに至りては患者自ら既に長生の望みなきを覺悟し其の子弟も亦之を定れる天年と認めつゝ殆ど自然に放置するの傾向なきにあらざれば老病の十の五六は再び起たざるを常とするもの〻如し幼者既に發育の道を得ずして夭折し老者亦た衰耗を回復すべき術なくして遠逝す衞生治病の知識に乏しき未開野蠻人の其の口數を漸減して終に人種絶滅の不幸を來すの因一に此に存せずや而して臺灣の土番も此の不幸圈中の人たるを免れざる境遇に在ることそ可憐の極みなれ

臺灣の土番をして斯くも百年一日の如く其の舊態を株守して衞生治病の知識を啓發せしむる障碍をなすものは畢竟其の開化の度の低下に在るも就中疾病の原因に關する深き迷信に桎梏せられ他に良藥明法の有るあるも之を採用するを知らざるに在り彼等は總べて靈魂の不滅を信ずると共に之れより變じたる惡魔の存在をも信じ疾病は惡魔の崇孽なりと固信ずるが故に此の病因たる惡魔の驅除にのみ力を盡して平素に生を衞り病時に之を治するの道あることを知らざるなり故に彼れ等は醫師の代りに巫覡を要し醫藥の代りに咒術を用ゆ今左に各蕃族に行はるゝ此の治病的迷信の著しき例一二を擧げて言はん乎

北方山中に占居するアタイヤル族といへるは病にかゝる時巫女は一種の黄色なる管玉狀のもの一箇を携へ口に咒句を誦しつゝ一竹莖を水平に支へし上に其の玉を載せ玉の竹莖上に留まるを以て亡魂を驅除し得たるものと信じ南方山中に分布するツァリセン族といへるは身に不快を感ずる時屋內の寢所に近く草蓆を敷き檳榔子等を陳ねて祖先を祭り巫女ありて口に咒句を唱へつゝ一束の麻糸を手にし病者の身邊にて之を振ひ且つ兩手にて病者の身體を按摩す更に臺東平原に居住するアミス族中の一部に行はるゝ治病術に至りては更に奇なり其はアウスタラリヤ土人及びアメリカ土人中に多く行はるゝ吸吮治病と呼はるゝ特風と同一なるものにて咒者は病者の身體を吸吮し口中より種々なる物質を出し示して始癒せしむるものとす

以上擧ぐる所の事例は迷信は乃ち迷信の圏內を脫する能はざれども其の間多少發達の差度を示すものありアタイヤル族の圓形なる物質を竹莖に靜止せしむる方法の如きは全く迷信の外に求むべからざる慣行なるもツァリセン族の病者の身體を按摩する如きは寧ろ醫術の原形に屬すといふべきに近くアミス族の吸吮術に至りては尙ほ迷信の區域を去らざるも他に心理的治療の意味の偶然に寓せらるゝのみならず或る他の蕃族には此の迷信的方法の一轉して蛇咬の害に應用せられ顯著なる醫術的の手段となりつゝあるもあり又前項に引ける蕃俗采風圖に記せる浴水治療法は今は熟蕃と化したる一族の舊時の狀態を寫せしものなるが之と類せる方法は他の土蕃にも行はれ盛暑の時の如き男女とも毎日清冷珠を欺くの溪水に浴泳する風ありて自然冷水浴の衛生的方法に適へるものあり其の他自然の經驗の敎ゆる所によりて某木葉を煎服し某草根を生咬し或は某の草木葉を虫害に用

ひ或は脂肪の類を創傷に塗る等の方法は各蕃族に通じて見らるゝ所とす

されば臺灣の土蕃も絶對に衛生治病の知識無きにあらずして只之に乏きのみ否な未だ發達を見ざるのみ而して元來之れ等の迷信に訴へて其の驅除に力むるもの即ち彼等が病苦の厭ふべく長生の樂むべきを願ふの情に出でざるはなきに在るを知らば此の慾望を利用し既發の觀念を啓發し之に簡易の衛生法を傳へ之に適宜の醫藥を與へ以て漸次に開導を圖り以て其の天年を全ふせしむるの道を講ずるは亦た我が母國々民の新附の民を馭する所以の一義務なるべきを知るなり

（完）



衛生叢談

◉子宮癌の話

Dr. N. N.

子宮癌と云ふは、中々多き病にて、或人の統計にては、癌で死ぬる婦人が百人ありとすれば、其内の三十三人までは、子宮癌即ち子宮に出來る癌にて死する由、左もあるべし、大底の婦人科病院にては、月に寡くとも三四人の子宮癌患者の、來院せぬと云ふ事なき程なり、

子宮癌も亦子宮に出來る腫瘍の一種なれど、之は子宮筋肉腫に比すれば、遙かに性質の惡しきものにて、速に治療を施さゞれば遂に一命を失ふに至るべし

子宮癌の出來るは主に四十歳より五十歳位の間なれ

ど、去りとて亦尚は若き婦人にも出來れば、亦五十歳以上の婦人にも出來る事あり、
子宮癌の出來初は、別に何の障りもなく、患者は平生の如く健康に生活し居れど、癌の漸次肥大するに從ひ患者の注意を呼び起すは、血の下る事なり、此の血の下るはまじわりの後ち抔に多く、亦月經の際には一層甚しく、其の後にて牛肉の絞り汁の如き液の下る事あり、亦時としては不意に下血し月經の既に閉ぢし婦人抔にては、再び月經の始りしかと疑ふ事あり、其他又不潔に爲し置く人にては、下りたる液腐敗して甚しき臭氣を發する事あり、以上の外亦た子宮が甚しく痛む事あれど、之は必ず有る事にはあらず、又食慾減じ食物を見れば、胸惡しく强いて食物を採れば、嘔吐を催ふすべし、如斯有樣にて患者は漸々瘦せ衰へ殊に痛みある場合には、其の爲めに夜となく晝となく苦しみ、遂に一貳年の內には衰弱の爲めに倒るゝなり、
如斯恐しき病なれど、早く之に治療を加ふれば生命を拾ひ得る事疑なし、さて子宮癌の治療と云ふは今日にては外科的に之を切り取るの外なきなり、世間動もすれば、子宮癌の施術は結果左程面白からず抔唱ふる人あれど、之れ一を知りて二を知らぬ僻見と云ふべし、現に獨逸などの大家にては、澤山の子宮癌患者に施術して、好成績を擧けたる人多きにあらずや、
子宮癌の施術が不結果なりと云ふは、之れ施術の罪にはあらで、患者の施術を乞ふ時期の遲るゝ事主なる原因なるが如し、子宮癌の施術は初期なれば左程六つヶ敷き施術にもあらず、又左程危險なる手術にもあらず、況して麻醉藥を用ゐて後ち爲す事なれば少しの痛みもなし、凡て世の婦人方は、無闇に手術を恐れて遂に時期を失する事あり、されば上に述べ

たる如き徴候あれば、勿論一旦月經の閉ぢし婦人にて再び血の下る如き事あらば、速に適當の婦人科醫の診察を乞ひ、幸にして子宮癌の如き恐しきものにあらざれば、自らも大いに心を安んじ得べく、若し運悪しく子宮癌ならんには、速に治療を加ふる事を忘れ給ふな、

◉爪の衞生

爪と云ふは申す迄もなく、手足の指の尖端にある大切な道具である、之れは矢張り皮膚と同種類のものであつて、犬や馬ては之れが靴や下駄の代りを爲し、猿や猫では之が色々な用に立つのである、先つ貳つ三つの例を擧げて見れば、猿が地面を掘る時には鍬の代用を爲し、敵と戰ふ時には武器となり、木に登る時には爪にて攀ぢ、其他木の實の皮を剝く時、物を集拾する時、皆な爪が非常に働くのである、人間にても亦是程になくとも、爪の効用は大いなものである、第一爪がなければ、我々の手にて爲す精巧なる仕事は、一切出來ぬである、斯樣に大切な爪であるが、之が亦時として不測の災を被らせる恐れがある、夫れは外でもない爪の尖端と指の間に溜る爪あかである、

抑も此の爪垢と云ふのは、決して爪の如く身躰の一部ではないので、指が色々な仕事をする間に、諸處の塵埃が此の隙間に這入り込むたのである、丁度部屋の隅や椽の下に、塵埃の溜るのと同じ譯けである、從つて土を弄せば土が這入り、汚水に浸せば汚水が這入るは明な事である、從つて土の中なり汚水の中にある、不潔物は皆な爪垢の成分となり得るのである、啻に不潔物計りてなく、其内に存せる種々の恐るべき黴菌も亦た共に其内に潜み得る譯である、近頃或る醫學者が一日色々な仕事を仕て後ち、其の爪の垢を採り寒天培養基と云ふて、黴菌を培養するも

のに植へて見たのである、すると二三日後に十幾種と云ふ黴菌の集落が發生した、シカも其中の二三は恐るべき發病黴菌であつたと云ふ事である、實に之で見ると爪垢と云ふものは恐るべきものである、爪に爪垢を附着けて置くのは、恰も毒藥を盛つた盃を口の側に置くのと同じてある、皆さんは能く御承知の事と思ふが、此頃の寒い天氣の日に、屋外を歩行して後ち室内の暖き處に入れば、脚部が頗る搔痒を感する恩はす之を爪で搔く、すると二三日後に其處に膿を持つた、できものが出來る、之は外ではない爪の間にあつた不潔物、殊に黴菌を毛孔の中に擦り込んだ爲である、亦た子供が喧嘩をして、ひつかいた痕が屢々化膿する事がある、之も同じ理屈である、されば此の危險なる爪垢は、是非とも平生から注意して取除き置かねばならんのである、之れには別に手間も面倒もないので、度々爪を短く摘んで、尙は爪垢が溜つて居れば、鋏の先端なり小楊枝なりで、取り除きて後ち石鹼なり石炭酸なりで、洗へばよいのである、吾國では奇妙な迷信があつて、小指の爪を摘むと馬鹿となるとて、之を大切に保存する人があるが、之は甚だ宜しくない、屢々自他に負傷をさせる計りでなく、危險極る爪垢の溜るのには最も適當である、如斯習慣は斷然廢止する義務がある、追々新年も迫り來り、何れの家庭にても例年の如く、歌留多遊び抔は盛んに行はる事と思ふ、歌留多遊びには得て爪の爲めに負傷し易いのである、況してや上述の如き危險もある事なれば、努々爪の衛生を怠り給ふな、

再び南京豆に就て

本年四月の本會雜誌に南京豆の効用に就て少しく記載し置きし處、昨今に至り會員諸姉より色々の報告

を得たり、其多數は南京豆の効用を認定せるものなりしが、同時に又頗る不結果なる報告も來れり、其大要を擧ぐれば、春以來大勉強にて日々南京豆を食し居れど、今以て少しも身躰の肥ゆる模樣も見へぬ、而已ならず昨今にては、其爲めにやあらん、下痢を起し、其上南京豆には最早や飽き果てゝ見るも忌ましとの事なりき、成程此の報告にては如何にも不結果に相違なきも、之れ決して南京豆の罪にはあらさるべし、凡て如何に効用ある藥品なり滋養物なりを用ゆるも、同時に他の不養生を行へば、如何なる藥品滋養物も、其効を顯し得ざるは明なる事ならずや、されば南京豆を用いると同時に凡て他の事にも精々養生する事必要なり、又た南京豆の爲めに下痢を起すとせば、之は一は嚙み方の不足にも因るべく又豆の炮り方の不足にも因るべければ、是等の點に充分注意しそれにても尚下痢を催ふせば、暫く南京豆を廢するの外なきなり、南京豆の單味なるは誠に致し方なき事にて、此事に就ては記者も色々と頭を勞し、如何に調理せば飽く事なく南京豆を續用し得るやと考へたれど、未た適當の方法を發見せず、讀者諸姉の中に良き御考案もあれば敎示を吝み給ふな



普通看護法（第六）

在大學　T. S.

○大便の事

大便も亦た尿と同しく、之れを撿査する事が必要で御座います、先つ大便の取り方から申しますと、之も尿と同じく起居自由の病人でありますれば、

別に面倒な事は御座いませんが、重病人の大便を取りますには、夫々工夫を致さなければなりません之れには先づ第一に便器が必要で御座います、便器には色々御座いますが、陶器製か或は赤銅眞鍮抔で拵へたのが宜しう御座います、而して便器には必ず蓋の付いたのでなければいけません、扨て此の便器を用ゐますのには、前々號尿の處で申しました通り、用ゐます前に一旦湯で洗ひまして、之を温めるのを忘れてはなりません、其外に亦油紙と腰枕が必要で御座います、腰枕と申しますのは、ゴム引の布で拵へました細長き枕で御座いまして、中に毛を詰めたので御座います、勿論腰枕が間に合はぬ場合には、坐蒲團を三折か或は四つ折にして、其上を油紙或は布にて包むで代用じても、宜しう御座います、扨て此に三つの道具が揃ひましたれば、患者を仰向に寐かせまして、夫れから一人助手を頼みまして、其人に輕く患者の腰の處を持上げさせまして、其下たに腰枕を入れるので御座います、腰枕を入れましたらば、腰の下に油紙を敷きまして、其上に便器を丁度肛門の下たの處に差込むので御座います、勿論此の場合には、患者の膝を屈めさせて置く方が宜しう御座います、患者に依りますと大便を致すのに大層手間を取るのが御座います、此場合には患者の膝の上に輕き蒲團を掛け置きまして、患者の冷ぬよう注意せねばなりませぬ、大便が充分出ましたれば柔き紙にて肛門を拭ふて後ち、靜に便器を取り出し次いて腰枕と油紙を取去るので御座います、

斯の如くして大便を取りましたらば、直に便器に蓋を致しまして、之を病室の外に持出すので御座います、

扨て大便に付て調べる事は、一晝夜間の便通の度數、大便の量、其の色、臭氣、硬軟、及び異物の有無等で

御座います、此等の内で度數と申しますのは、患者が一晝夜の内に幾度便通を致したかと云ふ事で御座いまして、之れは体温表の中の便通と書いてある行の中に記入するので御座います）

大便は醫者が特別に命じた場合でなければ、只だ度數と硬軟とを調べて後ち捨てゝも宜しいので御座いますが、若し次に申します様に、色其他に變がありましたれば、之を保存して置いて醫者に見せなければなりませぬ、

大便の硬いとか軟かいとか申す事は、別に玆に申す迄もない事で御座います、只だ大便の極く軟かいのは之を痢便と申します、

大便の量の多い少いは之も申し上ぐる迄もありません、

大便の色は病氣に由りて、色々となります、黑い便は胃や腸から出血した場合に出ます、亦鐵の這入た藥や、ビスムートを合む藥を飲んだ後では、大便が黑くなります、又水銀を合む藥を飲んだ後では綠色になります、亦た黄疸の人の大便は灰白色であります、其外亦大便には血が混したり、膿が混したり、或は亦粘液と申しまして葛湯の様な液が混して居る事が御座います、

健康な人の便でも中々臭氣がありますが、黄疸の人の便は一層臭氣が甚しう御座います、

其外亦た大便の中には色々の虫、譬ば條虫、蛔蟲などの虫が混じて居る事が御座います、只た蟲斗りでなく病氣に由りては、石が混して居る事が御座いますから、看護なさる方は便通の度ゝ精細に撿査なさらなければなりませぬ、

尙ほ一つ申し上げて置きたき事は、急性傳染病患者の大便は、四十倍の石炭酸か或は亦五百倍位の昇汞水の類にて、充分之を消毒する事を忘れてはなり

ません、亦た度〻下痢を致します患者では、遂に肛門が爛れて強く痛む事が御座います、此場合には五%硼酸軟膏を、指にて肛門に塗り付けて置くのが宜しう御座います、

尚ほ一つ申上げて置きたいのは、急性傳染病患者の便は勿論、便器に觸れた方〻は必ず石炭酸或は昇汞水にて、手を洗ひて消毒する事を忘れてはなりません、

◉咯出物の事

咯出物と申しますのは、患者が咳嗽の際吐き出します、咯痰或は血液の事で御座います、凡て咳嗽ある患者は勿論咳嗽なき患者にても、病床の傍はらには痰吐を備へ付けて置く事が必要で御座います、痰吐きは色〻御座いますが硝子製のコップ殊にぎざ〳〵のないコップが宜しう御座います、コップには必ずブリキ製或は木製の蓋を付けて置く事が必要で御座います、尚ほ豫めコップの中には少量の石炭酸を入れ置くのが宜しう御座います、殊に肺結核の患者にては決して此事を忘れてはなりません、

重症の患者が咳嗽を致したらば、看護をなさる方は直ちに痰吐きのコップを、患者の口の傍はらに宛て咯痰を取らなければなりません、僅かな事で御座いますが咯痰を口中に溜て置きますのは、重症患者に取りては誠につらい事だそうで御座います、又咳嗽多き患者は成る可く枕を高くして、半臥の位置にして置くと大いに樂で御座います、

◉吐出物の事

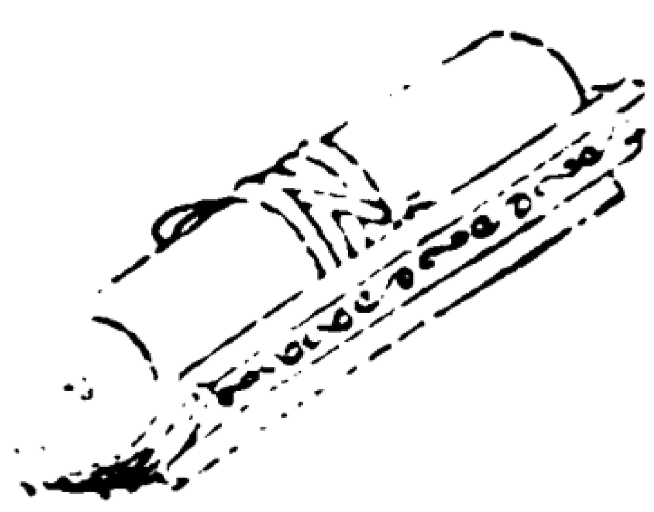
吐出物と申しますのは、患者が嘔吐の時に吐き出しまする色〻のもので御座います、

患者が嘔吐します時に、頭を餘り低く垂れますと苦しみますから、看護をなさる方は、一方の手を患者の額に宛て、他方の手で金盥なり、或は鉢なりを持

ちて吐出物を受けて居るので御座います、又嘔吐の際は成るべく患者の衣服帶抔を、緩めた方が宜しう御座います、

患者が嘔吐を止めましたらば、淸水にて口中を含嗽せしめて後ち、靜かに安臥せしめ、吐出物は直ちに之を運び出して後ち、之に葢をして醫者に見せなけねばなりません、

人事不省の患者が嘔吐します時には、兩手にて頭を少し前に持上けて後ち、之を横に向けて吐かせるのが宜しう御座います、吐出後は布片に水を付けて口中を拭はなけねばなりません、





内外實用料理（第三）

横井たま子

正月の貯へ肴品々

●食つみの事

此食つみの式は昔しより貴きも賤しきも年の始めの食始めとして一家族打寄て行ひたる儀式なり、その飾り附けは、三方に奉正紙を敷き其上に白米を山盛りにして上に橙、鰕、廻りには榧の實、ほんだわら、こんぶ、干栗、抔くさ〳〵の物を盛りて備へたるものなり、いかなるわけにやとおしたづぬるに此くさ〳〵の物の中には滋養ある物又は藥種に用ゆべきものも含みあるか故に之を取り交て食すれは一家の

の丶壽き永からんため衛生を重じたる古式なりと、されば一月三ヶ日雜煮を食するも此の例にしとしき禮なるべし、

●盛出し雜煮

雜煮の拵へ方は國々の風にて多少の違ひあれども一般に餅は一家の和合を形取りて祝ふものなれば丸形をよしとす、府下などは大方四角なれども之は手間をはぶきたるものなるべしされば形はいづれにせよその元をたゞし且つ味の真を賞翫すれば目出たし

○大皿又は大鉢の片かわに餅を盛り（餅は餘り大きからぬをよしとす）一方にかしらへものを盛り臺に載せ清汁を入たる鍋を火ちりんの上に置きいつれも客の前に持出し拵らへながら客に進むるは中々興あるものなり今其かしらへものゝ取合を示すに左の如し

○鳥類、ちくは、糸蒟蒻、蕪菁、胡蘿蔔、鹽松茸、芋、みつ葉、

○焼鳥の類又は一ト鹽の魚類、芋、菜、牛蒡、大根、昆布、つと豆腐、

○かまぼこ貝のはしら（又は貝類もよし）椎茸、くわゐ、芹、焼豆腐、

○するめに、昆布、菜、蕪菁、芋、白魚干、

○其他何肉にてもかしらへによし

●雜煮のかしらへものゝ拵へ方

○野菜類は大かた湯がくべし

○鳥と肉類は是も一寸湯がきたるをよしとす略せば生のまゝにてもよろし

○するめは水に浸し柔らかになりたるもの

○魚は焼くものは焼き一ト鹽のものは一寸湯がくなり

○ちくは、かまぼこ、貝類は別に湯がくに及ばず

●正月の貯へ肴品々

大根又は蕪菁を極薄く輪切にし二三日間日に干してひたる時芥をかたくねり干たる大根を引き延し其中へ入れ小ゆび位のふとさに卷、こん布にて結びその卷たる大根を浸すために、三杯酢を少し（大根に吸ひ取るだけ）器に入れ其卷たるまゝ暫時浸し置き取合の肴とすべし、

●小鯛の酢漬

小鯛を幾尾にても鱗と腸をとり全躰のまゝ鹽を強くふり懸け半日程置きて後其鹽をしためて生酢を充分に懸けて半日其まゝに置又其酢をしためて此度はさらに器に入れて三杯酢を甘く拵へ其上に懸け翌日より食すべし骨もわたまも柔らかになりて殘りなく食わるゝものなり

●鯊の酢漬

鯊を白燒にしてわたゝかき處へ三杯酢を懸けて蓋をなし翌日より食すれば是も又骨とも柔らかにて妙なり又鯊は白燒にして暫時醬油と砂糖と鰹節とにてとろ〳〵甘く煮れば重詰に尤もよし

●薄板牛蒡の油わげ

牛蒡の太き品を六七寸に切り、ざつと湯で竹の細く薄き篦らを皮と心との間に通じて湯の中に暫時入れ置き而して後ち下の方より其心を推せは其まゝ逆に抜けて管となるなり其管の破れぬ樣に味つけて下煮し其管の中へ魚の摺身を詰め込み、ころも懸けてわげ、而して之を斜に小口切にせるなり、その魚の摺り身とは何魚にてもよし魚を片身づゝにおろし骨を去り皮を剝ぎ少し鹽を加へて摺鉢にてよく摺りたる生身なり

●七色なます

初め大根と蘿蔔をせん打にし、（略せばなますおろしにておろすなり）摺鉢の中に鹽少しふりかけ揉て之絞り、而して推茸、と相頁麩は細かにきざみ淡味をつけ、蓮根は湯で丶薄

くきざみあふらあげは二つ割り庖丁にて中の白豆腐をこさぎ取り上皮のみを細くきざみ、白ごまを煎りて擂鉢にて擂る時前に油あげの中より出したる豆腐をも一處に擂交せ酢と醬油と砂糖にて加減を爲し他の品々と共に、干柹、味柹、樽柹いつれにてもよし程よく切りて一處によく掻交ぜるなり器に入れ上の處に柚子の皮を薄くきさみちらしに懸けて食すべし但しあしらへものを二た品減ずれば五色なますとなる之は一週間よりも長く貯へて差支なし却て味ひよろし

●鴨の吸物

鴨の身を薄く切り、骨は能くたゝき丸め、ざつと淡味をつけ鹽松茸に、三ッ葉を一寸位に切り常の清汁にて吸口は柚子又此中へ餅を小さく四角に切り一寸燒て二ッ三ッも入るれば雜煮の氣たいとなるなり

●甘寒の菓子

初めかんてんを半分水四合の割にて煮るべし、甘寒は凡大なるを十五位之を横に七分三分に切り上の三分を蓋となし下の七分は中の實を抜き出し其中へ甘寒のしぼり汁とかんてんを砂糖にて煮つめたるものを流し込むなり此十五の甘寒の汁のみにて不足なる時は他の小さき甘寒の汁をだすべし砂糖を入加減をしどろ〳〵になるまで煮つめて前に實を抜き出したる中へ入れ、而して蓋を爲し暫時置けばかたまるなりかんてんは餘り堅からぬをよしとす、此蓋の取手あるもあらぬとも茶の木の葉、又は椿の小さき葉をさし込めばちぎりたての甘寒のやうにて見はへ美くし之を客に出すには皿の上に一ッ載せ匙じを付て進むべし、食後和洋兩用に出す上品なる菓子なり

中外彙報

◉年齢と死亡

年齢と死亡は密接の關係を有するものにして統計家の說によれば尤も死亡數の多きは當歲より五歲迄の小見にして之を外國の例に照すも本邦の統計によるも明かなりと云ふ其原因に就ては種々研究すへきことと多々あるべきも撒遜國にては小兒死因を精査して乳兒死亡の多きは母親の授乳せざること（私生兒の數も關係あること）となし貧困耽酒賣淫を防ぎ一般の淸潔法を行ひ强熱の暑氣を避けしめ、工業都會にては職工の住家を市外に設けさせ女工は產前產後六週間の休暇を與へ乳母の撰ひ方は嚴重なる警察的檢査必要ありと兎に角其死因に就ては歐洲と我邦とは異なる點もあるべけれども小兒死亡の多きは東西符を合はするが如しトーチルと云へる人は左の如く言へり

凡そ人の死ぬる數は其年齢が五歲までに殆ど十分の五である而して其夭折の多いのは看護の道を得ないといふことが其幾分を占めて居ると

我邦小兒死亡の統計に就ては其精細なるを知らされども去る明治三十年中の調査によれば左表の如し

年齢	百分比例	年齢	百分比例	年齢	百分比例
〇—一	三三、一	二〇—三〇	七、〇	七〇—八〇	一〇、九
一—五	一三、九	三〇—四〇	六、〇	八〇—九〇	四、三
五—一〇	三、三	四〇—五〇	七、〇	九〇—一〇〇	〇、四
一〇—一五	二、一	五〇—六〇	八、三	一〇〇以上及未詳	〇、四
一五—二〇	三、三	六〇—七〇	一一、〇		

◉鼻の改造法

造鼻術とて鼻なき人に鼻を造る術は、外科醫の方にては、左程新らしき事にもあらず、我國にても既に諸大家が此術を施して、不幸なる無鼻者の面に意外の愛嬌を裝ひしか、どうも造鼻術にて造りし鼻は、

鼻と云へば云ふもの丶、迚も天然のものに比較し得べきにあらざるなり、之とは話し變れど近頃ペルリンのヨゼフ氏は、數多の鼻の形狀見惡くして困り居る人々に、鼻の改造術を施して、大に好結果を奏せしとて、之をパリスの外科學界にて報告し居れり、氏の施術したる中の一人は二十八歳の豪農にて、其鼻は頗る尖りをまけに其先端は少しく曲りて恰も鉤の如くなりしが、氏の手術に由り常人に優るも劣らぬ美鼻となれりとぞ、他の一人は或る貴女にて、其鼻は頗る長きのみならず、其先端は頗る肥大して恰も胡椎を付けたる如くなりしとぞ、他の一人は鼻の鼻翼頗る小にして爲に鼻の形狀惡しく、又他の一人は鼻の孔至て大にして、他の一人は鼻の頭か馬鈴薯の如く、異形を呈し居りしが、此等は皆な此の手術に由りて、前日同樣美事の鼻となりし由、氏の手術にして弘く行はる丶事となれば、西洋は勿論、我國にても、獅子鼻團子鼻等にて、苦勞する人は、一人もなきに至らん、

◉異物嚥下の注意

去月廿日胃腸病院に於ける岡田博士長與ドクトル北村學士の異物嚥下に關する談話は子供を持てる人々や人の子を訓育しつ丶ある小學校教員などの常に心得置きて有益なる節の多ければ左に其談話の要領を大日本衛生雑誌より摘記すべし

岡田博士（和一郎）の談話　是は先年の事であるが小供が屋根屋の眞似をして釘を一つかみ口に入れてどうしたはづみかそれを皆呑込んでしまつたが直に切開して取出すといふ譯にも行かぬからマアじつとして經過を見てゐた其時私は獨逸の雜誌に芋を澤山に食はせて大便を澤山に拵へるが宜いといふ事がチヨイと書いてあつたのを思ひだして直にそれをやつて見た子供の事だから喜んで澤山に

芋を食つたが二日の間に十三本といふ釘が大便に包まれて出て來た

●長與ドクトル(稱吉)の談話　ドクトルは釘碁石硝子のかけ針二錢銅貨などの實物を机上に並べて是等の嚥下物は廿四時間乃至四十八時間の內に出て來たものであると說明し大概は其恐るゝに足らぬ理由より泡を食はずに靜かに經過を見るがよいと述べ左の一笑話をなせり

或婦人が一ばん大へんに酒を呑んで醉ばらつてしまつて翌朝さめて見た處が入歯の行衛が知れぬ是は屹度呑込んだに違ひないといふので大さわぎをしてやつて來ことがありました其時はまだレントゲンの光線はなし外から見ても分らう筈はなしマアさう騷がずに一週間ばかり體を安靜にして大便を檢して見るがいゝと言つて聞かせても患者は大不平で何でも呑んだに違ひないから取り出して呉れと迫るをヤットの事で其日は歸らせておいた處が其翌朝は非常の喜びでやつて來て入歯は袂の中にあつたといふ事でしたそれだから醫師があまり分つたそうな貌をすると袂から出た時に困りますまた或る醫者が不完全なレントゲンで照して見てどうやら釘らしい物が見えるといふので輕卒に切開して見た處が何にも無かつたといふ恐ろしいことがあつた云々

●北村學士(精造)の談話　或婦人が針を呑んで非常の痛苦を感じて終に切開して二本取出した又小供が大きな鉛のメンコを呑んで血まで吐いたといふ騷ぎであつたが三日目に鯛の頭の尖つた骨三個と共に出て來ただから異物嚥下の場合には何も騷ぐには及ばぬ芋を食つて糞を澤山に拵らへると謂ふより外はない云々

◉腦力永續法

學者文人政治家の如く主として腦髓を働かすものが如何にせば其腦力に疲勞を來すこと少くして多く事務に堪へらるべきやとは衛生家及び躰育家の間にいろ／＼と說わることとなるが此程米國のリランド氏と云へる人が述ぶる處によれば先づ第一朝起の時間を六時なり五時なりに一定することとなりこれは同氏の工夫を經ざれども昔より知れ渡りたることとなるが扨て同氏の新案と云ふものは夜寢る前に明日爲すべきことを心中に决定し置くこととなり然らば起き出で事に當るも意志が恰も睡眠術によりて左右せらるゝが如くに能く一定の方向に運轉して事務は運び易く從つて腦力も疲勞すること尠しと此は同實驗に基きたるものなりといふ

◉感冒と小學兒童

頃日流行性感冒大に流行して是れに冒さるゝもの頗る多し而して小學兒童の是れに罹るもの最も多きかと云ふに是れ全く校堂の寒冷なるが爲めなり廣濶なる校堂にして平常採光法及び空氣の流通上注意せるより冷氣の侵入すること中々强烈なり然るに小學校內には之を防ぐべき煖爐の裝置なく身躰の發育未だ完全ならずしてかよはき兒童等は只さへ寒き校堂內に椅子に倚りて足部を垂れ靜粛を守り居れるより血液の運行自から緩慢となり躰温の發生非常に沈靜せるより冷氣は一入膚に透りて凌き難くなりゆくなりかゝる有樣にて課業を受くる生徒は實に憫然なるものと云ふべし

女生徒等の膣加答兒或は僂麻質斯等に罹れるもの著しく增加せるは此等の關係より起れること多し古の寺子屋の如く疊の上に坐して居るものなれは寒氣も左程にあらざるべきも板の間に椅子に依りて長時の課業を受くるものは實に甚しき寒冷を受くるものなり今の小學校には速に煖爐の用意を爲し

て校堂の冷氣を防ぎ兒童の攝生に注意するを急務とす若し現狀の儘にして放置せば生徒は遂に悉く鼻涕となり畢りて完全の教育を受くる能はさるに至らん學校衛生上重要なる事件なれば教育に從事する者は勿論世の父兄たるもの丶校堂溫暖法必要の輿論を喚起して此等兒童の苦寒を救はれたきものなり

◉四季と小兒の發育

或る醫學者は小兒の發育期を研究して曰く十一月より翌年四月までの冬季中は小兒の發育極めて遲く四月より七月までは丈延び八月より十月迄は躰量を增加すと云ふ

◉近視眼の豫防

讀書寫字又は裁縫等に多く時間を費す人は少くとも十分時間毎に必ず一回眼を遠き距離にある物躰に轉ずる樣になせば近視眼を豫防し得べし又眼を使ひ過ぎて眼の赤くなりて痛みを覺ゆることあれば硼酸水にて洗ふべし硼酸水を製するには硼酸半オンス（四匁）を一合五勺程の沸湯に溶し之を冷し置き用ゐんとする時微温湯に適宜に灑ぎ一日數回洗ふべし洗ひたる後はよく眼を乾かすべし

◉電燈と眼の關係

露國一眼科醫の研究したるところなりと云ふを聞くに人造の光の中に蠟燭の光は眼を害すること最も多くして最も害の少きは電燈の光なり而して最も屢々眼瞼を閉づるものは眼を疲らすこと甚だしきものにて其一分時間に人の眼瞼を閉づる數を統計したるに電氣は一、八太陽二、九瓦斯三、八脂燭六、八にして電燈尤も害少しといふ

◉白痴の原因

白痴の原因は主なるを遺傳とし次は母胎にありし際母の高度の貧血、飢餓、恐怖、心配、過度の飲酒等に基づくものを多しとす倘ほ難產及び生後の外傷、

病氣、血族結婚等に因するもの少なからず白痴の數は意外に多くして弘く世界を通算すれば通常の人五百名に就き一名の割合に當るといふ

●本年の赤痢に就て

本年初發より十一月十日に至る赤痢病の總數患者は四万〇六百四十六人死亡は八千九百五十三人之れを昨三十二年の本月十日現在に比すれば實に患者に在つて十万五千七百〇八人死亡にあつて二万二千七百四十九人の多きに達し岩手、福島、青森、宮城、長野、新潟の如きは猖獗の中心なりき倘千人以上の發生地を掲ぐれば左の十二縣なりとす

神奈川	二、七一三	新潟	五、六八一	群馬	一、二四七
千葉	一、三四八	茨城	一、一五五	愛知	一、六〇三
山梨	一、三九八	長野	二、六四四	福島	二、九六二
青森	二、四七六	香川	一、〇一〇	靜岡	一、三九四

●東京市傳染病患者數

本年一月一日より去月十五日迄の東京市傳染病總患者は二千五百五十一人にして内虎列剌病七名、赤痢病七百三十名、腸窒扶斯病八百四十五名、痘瘡三名、發疹窒扶斯病三名、猩紅熱十三名、實布垤里亞病九百五十名なりと

●牛疫鵞口瘡に就て

目下東京府下の乳牛を侵しつゝある流行性鵞口瘡は急疹性の傳染病にして口内、趾間、乳房等に水泡を發し獨り牛のみならず羊、山羊、豚其他の動物をも侵すことあり其傳染力强大にして一旦發生せるときは忽ち蔓延し悉く一地方の獸群を襲ふこと少なからず甞て獨逸の如きは其損害五千萬圓に上りしことありといふ

病牛の生乳を飲用すれば小兒は本病に感傳し往々熱候、嘔吐、下痢を發し口内粘膜に水泡を生じ甚しきは之れが爲めに死することあり大人に於ては其病症輕易にして單に下利するに止ることありと云へと

も病牛の乳汁は人の飲料に適せず此際は充分の注意を以てよく煮沸し若くは十五分間攝氏七十度以上の熱を加ふるを要す

◉看護婦試驗及第者

過日施行したる同試驗（府令第七十一號第一項に該當する）に及第（出願者二十名內受驗者十五名內學說及第者十三名內實地及第者十名）せる看護婦は十一名なる由なるが同試驗は今回を以て嚆矢とす

◉癩病撲滅に關する建議案

福岡、熊本兩縣下にては年々癩病患者增加するの傾向あれば此の際適當の撲滅策を講ぜざるべからずとて本期議會は該病撲滅調查會設置に關する建議案を出さんとの議ありと

◉東京市と大清潔法

和歌山德島大阪等にはペスト又々發生の由昨年のペスト騷ぎも丁度今頃なりしかば日本のペスト流行期は十一月より十二月にかけてなりといふを得べしとて東京市の各區衞生會中には本年も昨年と同じく大清潔法を行ふべしとの議あり多分は年内に其實行を見るに至るべきかといへり

◉第二豫備金の支出

大阪、和歌山、德島地方の「ペスト」益々猖獗を極むるより內務省衞生局に於ては「ペスト」流行地の健康者に豫防注射液を注射する爲め其經費として第二豫備金の支出請求を爲したる由



大日本婦人衛生會記事

◉十二月例會

十二月八日第二土曜日午後一時より本會の例會を麹町區永田町なる華族女學校附屬幼稚園内に於て開きたり醫學博士隈川宗雄君にはソマトーゼに就き先づ分析上牛乳牛肉鷄卵等に比較を取り最後にソマトーゼは以上の滋養物に比し劣るとあるも優ることなきを以て健康體の常用すべきものにあらずと結論せられ次に醫學博士弘田長君には女子衣服の改良に就き先づ古今體育の盛衰より女子體育の不振は其衣服の不完全なる爲なりとて女服改良の急務を説かれ終に支那朝鮮及泰西婦人の衣服を斟酌して調製せられたる博士新案の衣服を示して會員の意見に問はれ午後四時頃散會せしが當日役員には濱尾副會長、鳩山、高木、西男爵夫人三浦、松平芳子、西升子(大磯の別莊より)岡田、羽田、中濱の諸氏及川口男爵夫人にも參會せられ會員及華族女學校生徒を合せ百餘名の聽講者ありき婦人服改良の事は本會役員の常に苦心する處なるが鋭意女服改良の實行を擧げんが爲めとて當日濱尾鳩山夫人をはじめ袴を着けられしもの多きを見受けしが一般婦人の普く此風に倣はんこといと望ましけれ之を十二月納會の略況となす

●仁禮會長には同中將先頃薨去せられ御忌服中の故を以て參會せられざりき

●仁禮中將の御葬儀は去二十七日青山墓地に於て神葬式によりて執行せられ海軍儀仗兵朝野の貴顯紳士會葬していと壯嚴に式を營まれたり本會は薄儀を靈前に捧げ當日事務所よりも會葬せり

●華族學校附屬幼稚園借用に就ては學監下田歌子女子の種々斡旋せられし勞を謝し併せて之を會員に報ず

支會記事

●山形支會十二月例會

十二月二日第一日曜日例會を山形市高等女學校講堂に開く此日朝より天氣陰り雨さへ降り初め正午頃には雪を交へ寒氣甚敷にも拘らず本年の納會なればとて集會したるもの約五拾餘名午後一時三十分を以て開會す安村副會長を始め幹事等一定の席に着して後ち講師川上醫學士演壇に登り左の講話をなしたり

一小兒乳離れの時期及其食物に就き
一暖室の方法
一精神感動に因て生命を失ひたる一例

午後四時を以て閉會せり此日尚二三の講師來りて講話せらるゝ豫定なりしが各々病用の爲め參會せられざりしといふ

◉本會入會者

○事務所申込
●牛込區船河原町十三番地　通常會員　高木やす子

○日本橋　林都留子紹介
●神田區駿河台北甲賀町十番地　通常會員　清水たけ子

○大阪贊成員　安東忠次郎君紹介
●大阪市東區伏見町二丁目一番屋敷　通常會員　谷　政子
●大阪市東區伏見町二丁目四十九番屋敷　通常會員　谷　艮子
●大阪市東區道修町五丁目八番屋敷　通常會員　高井てい子
●大阪市東區平野町二丁目　通常會員　安住みや子

○長野　横内いわ子紹介
●長野縣東筑摩郡松本町六十六番地　通常會員　上條鈴子
●仝縣仝郡仝町百四十三番地　通常會員　小平春江子

○日本橋　安達かつ子紹介
●芝區高輪南町五十一奥平殿邸内　通常會員　瀧澤ふゆ子
●京橋區釆女町二十八番地　通常會員　美好子

○千葉　富澤幾子紹介
●本所區元町二十二番地田中喜作方　通常會員　細野と代子

○本郷　源美かな子紹介
●本郷區元町二丁目四十八博愛看護婦會　通常會員　木の下かく子
●仝所　通常會員　須田ふさの子
○麹町　塚本靜江子紹介
●麹町區飯田町五丁目三十番地仁壽病院　通常會員　奈良かな子
●牛込區中町三十三番地　通常會員　岡崎いし子
○神田　堀かた子紹介
●本郷區追分町百番地　通常會員　小林さだ子
○日本橋　森川かめ子紹介
本所區外手町四十四早川宮松方　通常會員　吉田こう子

臺灣松住氏通信

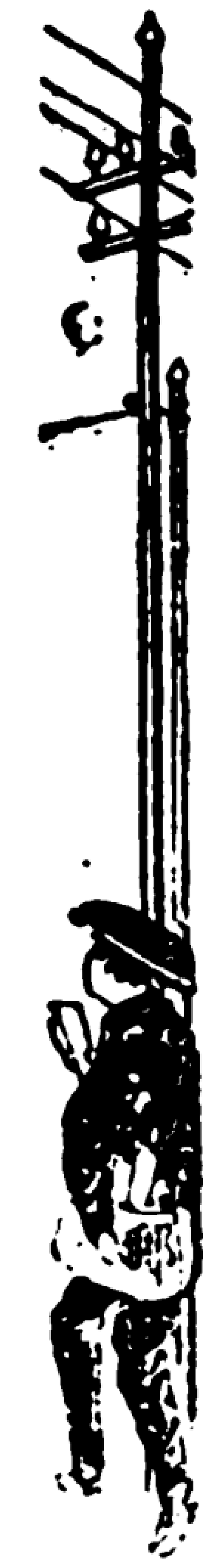
○臺灣　田村ませ子紹介
●臺灣臺北東門街土地調査局官舍いの一室　通常會員　森田きよ子
●仝いの七室　通常會員　村山ちよ子
●仝はの十室　通常會員　廣瀬しげ子
○事務所申込
●麻布區日本赤十字社病院内　通常會員　白川せい子
●陸奥國三戸郡八戸町大字馬場川港方　通常會員　武田りや子
●臺灣臺南縣鳳山城内鳳山醫院内　通常會員　高木俊子
○臺灣　日下靜子紹介
●臺灣澎湖島々廳内官舍　通常會員　山本とき子

山形支會入會

●山形市香澄町小鈴　通常會員　本目せい子
●仝所　通常會員　富澤むめ子
●仝香澄町木の實小路　通常會員　丹生きく子
●仝上之山湯町　通常會員　高内しけ子
○山形　山田すい子紹介
●住所後報を待つ　通常會員　栗山きよ子
●仝　通常會員　高村ふさ子
○府下千駄ヶ谷　内村よし子紹介
●宇都宮市三條町二十三番地　通常會員　千葉あや子
○濱尾副會長紹介
●本郷區彌生町二番地はの十七號　特別會員　隈川京子
○下谷區　石黑さよ子紹介
●下谷區中根岸四十七番地　通常會員　松澤安子

（以下次號）





轉居

會員諸氏御轉居の際は乍御手數事務所宛必ず御一報相成度候

- ●岐阜市縣立病院內へ　田口岩子
- ●大和國奈良市上三條町へ　伊達改　磯田梅代子
- ●麴町區飯田町四丁目二番地增田方へ　矢野德代子
- ●小石川區小日向臺町二丁目四十七番地へ　伴よし子
- ●宮城縣仙臺市宮城病院へ　伊藤れん子
- ●橫須賀汐留官舍へ　辰巳富野子
- ●牛込區西五軒町四十一番地へ　曾禰しん子
- ●神奈川縣小田原十字町三ノ六百八十二へ　俵常子
- ●大日本赤十字社病院寄宿舍內へ　五十嵐菊非子
- ●山城國紀伊郡深草村大字福稲四羽倉方へ　氷室長子
- ●神田區駿河臺鈴木町五番地へ　五十嵐つね子
- ●赤坂區表町三丁目青山御所前笠原文次郎方　藤谷やす子
- ●麴町區五番町四番地へ　飯田幸子
- ●麴町區內幸町貴族院官舍へ　近衛もと子
- ●麴町區飯田町六丁目七番へ　岩橋時子

以下次號

寄送書目

妊產婦の心得　安產育兒之法

醫學士櫻井郁二郎閲　廣瀨弘見著

（東京神田區鍛冶町四番地東肆誠之堂）（電話本局九百四十九番）　伊藤岩次郎氏寄送

右は誠之堂主伊藤氏よりの寄送に係る文章平易婦女子をしてよく其意味を理解し易からしめ妊婦產婦の養生より產後の注意初生兒の處置保育法に至る迄說き得て詳なり卷首には妊娠胎兒繪圖數葉を添へるありて婦人の座右尤も有益なる著書と云ふべし



鍋島侯爵夫人題字

下田歌子女史著

信越紀行

洋裝美本全一册

八月初旬出版

右は日本婦人第一號より連載せし本會々長の著作なり。今般人々よりの希望により更に集めて一巻となし、刊行することゝせり。同巻中には鮮明なる同地の名所圖畫數葉を挿入し、加ふるに同地に於ける歌人の吟詠あまたを添へたれば、居ながらにして同地の名所舊跡を知ることを得べし。且つ其製本は優美高尚にして、紙質等も精撰したれば進物としても最と體裁よき書なり、有志諸彥は賣れ盡さぬ内速に申込ありたし。

明治三十三年七月

帝國婦人協會

私立大日本衛生會

新潟支會規則

第一條　本會は大日本婦人衛生會に屬し婦人衛生の研究を目的とし兼て一般慈善事業を爲すにあり

第二條　當支會の會費は左の六種とす

終身會員　一時限り出金貳拾圓
特別會員　毎月　金參拾錢
通常會員　仝　金貳拾錢
支會員　甲毎月　金拾錢
　　　　乙仝　金五錢

第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし

第四條　會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衛生雜誌を配布す

第五條　會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衛生慈善資金とす

第六條　支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く
會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す
各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす

第七條　支會は毎月六日通常會を開き衛生及び慈善に關する演說をなすべし

第八條　毎年一月總會を開き支會の要務を舉行す

第九條　本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし

第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中有志者より物品の寄附を募ることあるべし
會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は贊成員となすべし

第十一條　一般慈善事業の贊助天災事變の救濟の事務は役員會の決議により實施するものとす

第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は成可く綿服を着用すべし

第十三條　特に本規則に揭げざるものは私立大日本婦人衛生會の規則を準用す

私立大日本婦人衛生會

山形支會規則

第一條　本支會は私立大日本婦人衛生會々員山形市在住者を以て組織す

第二條　本支會に會長副會長の外幹事四名商議員若干名を置く
會長副會長は公撰し幹事商議員は會長之を撰任す
役員の任期は一ヶ年とす

第三條　本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の撰擧庶務會計の報告をなす

第四條　入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依賴すべし
本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし

第五條　本會々費は會計幹事に納むべし
但し六ヶ月又は一ヶ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし

第六條　服裝は精誠質素なるを要す上着及羽織は絹布を用ゐるを禁ず

明治三十三年二月四日創立

私立大日本婦人衛生會
山形支會
事務所山形市檜物町川上方

●大日本婦人衞生會規則摘要

一本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究せしめ衞生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり

一會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

一入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込むべし入會者には會員證を交付す

一會員を分ちて終身特別及通常の三種とす

終身會員は一時に金拾圓以上●特別會員一ヶ月金貳拾錢以上●通常會員一ヶ月金拾錢を納むるものとす●男子贊成員亦同じ

一男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じと雖本も會に功勞あるもの又は本會に於て特別贊成員たることを望みたる者は役員協議に依り無會費とすることあるべし

一會員は本會に於て每月發行する雜誌を無料にて受ることを得

一退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より又通知すべし但既納の會費は返戻せず

一集會は例會總會及評議會員とす集會は八九月を除くの外每月一回とし通常第一土曜日午後一時より開會するものとす

但每會學識經驗ある者に衞生上の講義演說談話を嘱託し會員をして隨意聽講せしむるものとす

一會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を陪聽せしむることを得(勤めて衣服は質素たるべきこと)

一講義演說等は男子の傍聽を禁ず但贊成員若くは合同の緣故ある男子は此限にあらずと雖も贊成員の外は本會の都合に由り臨時謝絕することあるべし

●支會

一地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得

一本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載し申出づべし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報知すべし

一本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會へ納付することを止め支會の規定に依るものとす尙詳細は本會事務所へ承合すべし

●注意

一會費は東京府下に限り每月會費領收人を差出すべし地方會員入會の際は前金を以て會費三ヶ月分又は六ヶ月一ヶ年分を納付せらるべし

一會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局(東京牛込郵便局)宛振出あるべし又通運便何にても差支なし

一會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵劵にて納むるものは受領證送費として別に郵劵三錢を添へらるべし

但止むを得ざる場合には郵劵を代用するも妨げなしと云へども總て一割增とす

一轉居せられたるときは其旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

一會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざるものは役員會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

廣告料	
一行	十錢
一頁	參圓
總て前金	

本誌定價一部二十錢　每月一回發行

東京市牛込區矢來町三番地中丸、四

發行所　私立大日本婦人衞生會
東京牛込區矢來町三番地

編輯兼發行者　田中德三郎
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者　戸上義章
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場

(明治二十六年…第三種郵便物認可)(明治…年內務省許可)